

高知大学医学部
外科学講座外科 1

楷風

開講30周年記念誌

年報 第2報

2007年 (平成19年)

外科学講座外科 1 の大目標

優れた若い外科医(Academic Surgeon)の育成

目標達成のための三つの課題

- ・ 医学教育の充実:母校愛を培う教育を目指す
- ・ 良好な手術成績の達成:良好な手術成績は良好な人間関係から
- ・ 高知発の優れた研究を世界へ発信:研究は英語論文で完結

高知大学医学部 外科学講座外科 1

開講 30 周年記念誌

年報 第 2 報

2007 年 (平成 19 年)

目 次

巻頭言

花 崎 和 弘	1
---------	---

楷風会代表

田 村 精 平 (須崎くろしお病院長)	3
---------------------	---

関連病院代表

島 津 栄 一 (島津病院理事長)	5
-------------------	---

特別寄稿

相 良 祐 輔 (高知大学長)	6
倉 本 秋 (高知大学医学部附属病院長)	6
橋 本 浩 三 (高知大学医学部長)	7
橋 本 良 明 (高知大学医学部医学科長)	8
笹 栗 志 朗 (高知大学外科学講座(外科2)教授)	8
大 西 三 朗 (高知大学消化器内科学講座教授)	9
真 鍋 雅 信 (高知大学麻酔科学講座教授)	9
小 林 道 也 (高知大学医療学講座医療管理学分野教授)	9

教室の変遷

年 表	12
緒方教授時代	緒 方 卓 郎 (高知医科大学名誉教授) 18
	田 村 精 平 (須崎くろしお病院長) 22
	山 下 邦 康 (幡多けんみん病院長) 24
荒木教授時代	荒 木 京 二 郎 (高知大学名誉教授) 35
	松 浦 喜 美 夫 (仁淀病院長) 37
	小 林 道 也 (高知大学医療学講座医療管理学分野教授) 38
現在	花 崎 和 弘 46
	杉 本 健 樹 51

30年間の業績	54
---------	----

学位取得者	158
-------	-----

関連病院のあゆみ	162
----------	-----

30年のあゆみ	185
---------	-----

医局ニュース	187
教室構成員（2007年12月末現在）	191
教室の診療研究活動	
乳腺・内分泌（杉本健樹）	192
食道（秋森豊一）	193
胃（並川努）	193
大腸（岡本健）	194
肝・胆・膵（岡林雄大）	195
小児外科（緒方宏美）	195
第2回 楷風会賞受賞者	
杉本健樹	196
第2回 Impact Factor 賞受賞者	
前田広道	198
関連病院の手術件数	199
学会専門医	
日本外科学会	202
日本消化器外科学会	202
日本消化器病学会	202
日本乳癌学会	203
日本小児外科学会	203
日本内視鏡外科学会	203
日本消化器内視鏡学会	203
医局スタッフより	204
楷風会名簿	
正会員	207
特別会員	216
編集後記	
花崎和弘	220

巻 頭 言

花 崎 和 弘

年報の第2号は教室開講30周年記念誌も兼ねた特別号となりました。ご寄稿に際して皆様方から多大なるご協力を賜り、誠にありがとうございました。

これまで教室には10周年、20周年などの節目の記念誌は不在でした。そのため今回の年報は格別な思いを込めて30年の教室の歴史を一気に振り返る様々な企画を盛り込みました。温故知新の旅へ上手に誘うことができるかどうか甚だ不安ですが、教室の総力を結集して作成させていただきました。尚、業績に関して出典が明らかでないものや教室が直接関与していないもの等は割愛させていただきましたので、予めご了承ください。

平成18年4月に高知へ参り、教室の舵取りも2年目を終えようとしています。“優れた外科医 (Academic Surgeon) の育成”という教室の大目標に向かって平成19年度も邁進しました。

お蔭様で昨年(平成19年1月から12月まで)は肝切除70例を達成することができました。これも一重に院内および関連病院をはじめとする周囲の皆様のご支援・ご協力の賜物です。特に消化器内科の大西三朗教授、麻酔科の真鍋雅信教授および両教室のスタッフの皆様には常日頃から個人的にも大変お世話になっております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成19年度の主なハッピーニュースを以下に述べます。

1. 外部研究資金の獲得増加(産学共同研究が2つスタート)
2. 全国学会の主題発表の増加
3. 国際学会発表の増加
4. 消化器外科手術症例データベースの完成
5. 久留米大学より小児外科医派遣
6. 教室員の昇進人事

各々について順番に概説します。

1. 教室を引き継いだ際、研究資金が大変不足していました。関連病院に泣きつき、なりふり構わず必死で研究資金を集めました。あの時皆様から頂戴したご寄付がどれほど有難かったことか。言葉では言い尽くせません。本当にありがとうございました。お蔭様で何とか窮地は脱することができ、徐々に教室運営や研究活動がしやすくなってきています。最近2年間で科研費も含めて複数の外部研究資金を獲得することができました。今後とも外部資金(グラント研究費)獲得に向けて努力を続けて参ります。研究資金の増加に伴い、教室員の学会出張等の金銭的負担を徐々に減少させることが可能になり、学術活動に弾みがついてきたのは言うまでもありません。また本年度は2つの企業(日機装社と日本トリム社)との産学共同研究が成立し、研究がスタートしました。地方大学の外科教室で2つの産学共同研究というのは大変珍しいと聞いています。尚、これらの産学共同研究に際しては相良学長からの強力なバックアップがあったことも付け加えさせていただきます。今後とも「研究をする上で外部研究資金を獲得することがいかに大切なことか」を自ら先頭に立って実践していきます。
2. 平成17年度までの全国学会の主題発表(教授を除く)は、公文先生、古屋先生らによる三編でした。教室員の motivation を上げるために、平成18年度から Honor board を設置しました。51個用意しましたが、設置当初は私の教授在任中にどこまで埋まるのだろうかと大変不安だったのです。しかし、平成18年度から19年度にかけて杉本先生、並川先生、岡林先生、秋森先生、前田先生などが続々と board に名を連ね、急成長しました。これはとても嬉しい誤算です。これからもこの勢いで board を埋めていって欲しいものです。
3. この分野はこれまで小林道也先生(医療学講座医療管理学分野教授)の独壇場でした。しかし、本年度は杉本先生、並川先生、岡林先生、前田先生、船越先生も加わり躍進中です。「英語力がついてから国際学会で発表しよう」なんて考えていたら一生発表できません。国際学会で発表しながら英語力もつけていってください。積極的に外部研究資金を獲得して国際学会でどんどん発表できるように各人努力しましょう。
4. 就任時から言い続けてきた教室の手術症例のデータベース作成ですが、消化器外科分野は平

成 19 年 8 月までにすべて完了しました。少ない人数で多数の手術をこなす多忙な中で本当に良く頑張ってくれた教室員に感謝します。それと同時にデータベースのメンテナンスを今後とも宜しくお願いします。尚、乳腺・内分泌外科も戦力が補強されたらデータベースの早期完成を目指しましょう。

5. 新戦力として平成 19 年 4 月より久留米大学小児外科（八木 実教授）から緒方宏美先生（助教）をローテーターとして派遣していただいております。八木教授のご高配に厚く御礼申し上げます。脇口教授をはじめとする小児科の先生方もこれで一安心していただけたのではないのでしょうか。緒方先生は就任早々から当科に馴染んでいただき、積極的に手術を行うだけでなく、半年もたない時期に英語論文を 1 編書き上げました。また、これも八木教授のご尽力のお蔭ですが、国立療養所香川小児病院小児外科の大塩猛人先生（当科の非常勤講師）からもご援助いただける体制を築くことができ、高知大学における小児外科の益々の発展が期待されます。
6. 昨年度は小林道也教授誕生という快挙がございました。本年度は杉本健樹講師が平成 19 年 3 月に助教授に昇進し、4 月から准教授（助教授という名称は廃止）となりました。更に 8 月には杉本准教授が病院教授へ、並川 努講師が病院准教授へ、岡林雄大助教が講師へ昇進しております。教室にとりまして大変名誉な複数のおめでたい人事が重なりました。特に倉本病院長や笹栗教授（外科 2）からご支援をいただき、杉本先生が外科学講座の乳腺・内分泌外科の部門長になっただけでなく、病院教授にも昇進したことは高知大学の乳腺・内分泌外科が対外的にも大きく発展する可能性が広がったものと大いに喜んでおります。現在杉本先生には国内外から様々な仕事の依頼が舞い込んできています。教室として今後乳腺・内分泌部門の人材補強を含む支援体制を急ぐ必要があります。今回昇進を果たした 3 人の先生方の長年のご努力に敬意を表すると共に、昇進に伴う責任の大きさを各人しっかり自覚していただき、益々ご活躍してくれることを期待しています。

お蔭様で本年度も多数のハッピーニュースが届きました。これまで四万十川のようにゆったり流れ続けてきた当外科教室の歩みも、最近 2 年間で流速が大きく変わってきているかもしれません。教室の slogan はこれからも“speed and activity”です。

指導者として“厳しさ 1 割、寛容さ 9 割”でやっていこうと心に決めて高知に参りました。しかし、実際は“厳しさ 9 割、寛容さ 1 割”になっており、いささか反省しているところです。長い歴史を有する某大学の教授から「大学医学部は 50 年で一人前ですよ」と諭されました。30 年の歴史を持つ高知大学医学部の外科学教室を短期間で飛躍させるには何が必要でしょうか？

私たちは優れた外科医をたくさん輩出できる“高知大学で最も光り輝く教室”を目指してこれからも努力を続けます。引き続きまして皆様からの温かいご支援・ご協力を何卒宜しくお願い申し上げます。

楷風会代表

高知大学外科学講座外科1開講30周年に寄せて

須崎くろしお病院 院長
田村 精平

高知大学外科学講座外科1の開講30周年、おめでとう御座います。開講当初から参画していましたOBの一人として大変感慨深いものがあります。開講当初の思い出などを記し、お祝いの一文とさせていただきます。

初代緒方卓郎教授のもと当時の高知医科大学第一外科が開講されたのは昭和53年4月でした。それまで緒方先生は岡山大学第一外科の講師として北研究室（通称北研）を主宰され、主に消化器を中心とした電子顕微鏡を使った超微形態学及び組織化学の研究をされていました。

私は昭和52年10月に関連病院での臨床研修を終え岡山大学に帰り、何処の研究室に所属しようかと考えていた時、緒方先生が高知医大の教授に決定したことを知り、いずれ高知に帰るつもりでいましたので「北研」にお世話になることにしました。それ以来、緒方先生には何かとご指導いただくようになり、早速「総胆管結紮とその閉塞解除後の肝の微細構造の変化に関する実験的研究」というテーマをいただき、ラットや犬を使い実験をしたものでした。

昭和53年緒方先生が高知医大第一外科教授に就任することになり、また、北研の先輩である清藤先生が助教授に就任することが決まりました。更に、北研で一緒に研究をしていました松山、大沢両先生がスタッフとして高知医大に行くのではないかと噂があり、北研では一番若かった私は大変心強く思い、のんびりと実験をしていました。ところが、昭和54年になり、いざ研究室の引越しという時に、松山、大沢両先輩は故郷岡山を捨てがたく、結局岡山大学に残ることになりました。そのため高知医大について行くのは高知県出身の高田早苗先生と私の二人だけになり、心細い気持ちになったことを覚えています。

それから当時北研で実験の手伝いをしていました尾崎、今枝両嬢と高田先生、私の4人で引越しの荷作りが始まりました。研究室の先輩諸先生方の研究成果、資料、実験器材など研究室の荷物を整理し、また緒方先生の居室の整理をしました。確か4~5日ばかりでやった記憶があります。

昭和54年4月岡山で荷物の積み込みが終わり、翌日高知で荷物を受け取り、何にもなくて、がらんどうの研究室への荷物搬入から高知医大第一外科の研究室がスタートしたわけです。研究室の水道の栓をひねると錆色の水が出、実験台もない研究室でただ掃除と荷物さばきの毎日でした。荷物整理がすんでからは電顕標本の作り方、ミクロトームのthick、thin sectionのcutting、ガラスナイフの作り方などを新しく研究室助手として採用した高橋、矢野両嬢に対し尾崎、今枝両嬢が2ヶ月間わざわざ岡山から指導のため出張してくれて、何とかthin sectionが切れるようになりました。研究室にはやがて透過電顕や走査電顕が並び、私も透過電顕を使い、論文を仕上げることができました。恐らく当時外科学教室でこれだけの電子顕微鏡の設備が整った研究室はないのではないかと思ったものでした。

私と高田先生が高知に帰る一年前の昭和53年4月には大阪医大出身の川村明広先生（現、くぼかわ病院院長）が入局第1号として入局していました。

昭和54年4月に私が初代の医局長を拝命しましたが、川村先生は外の病院に出ており、医局には緒方、清藤、高田先生と私だけで、ネーベン先の病院で臨床をする合間に、研究室の整備に明け暮れていました。

昭和55年には松浦、臼井先生ら9人の先生が入局し、更に昭和56年には金子、川崎先生ら3人が入局してくれまして 大学病院開院に向けて準備を整えました。

そして、昭和56年10月待望の大学病院が開院し、外の病院に出ていた先生方が帰局し、総勢17名で第一外科の臨床が始まりました。当時は臓器別のグループ分けはなく、皆で何でもやるという体制でした。その後も入局者は毎年多くあり、高知医大の中で最も活気のある医局だったように思います。その後、清藤助教授が岡山へ帰られ、代わって大阪医大から来られていました荒木先生が助教授に就任されましたが、高田先生が高知記念病院に帰り、私も昭和60年に

須崎市に須崎くろしお病院を開院し、高知医大の多くの教室のご協力をえて地域の救急医療を担うようになりました。その後、臼井先生が田野病院、川村先生がくぼかわ病院、公文先生が野市中央病院をそれぞれ開院し、それぞれの地域で中核的な病院として頑張っています。更に2代目の医局長でした山下先生が幡多けんみん病院の院長となり、3代目医局長だった松浦先生が公立仁淀病院の院長になり、第一外科のOBが西から東まで高知県の医療に少なからず貢献していると思います。研究、教育はもとよりですが高知県の地域医療における初代緒方教授の功績は大きいと思います。

平成8年緒方教授が退官し、荒木京二郎先生が2代目教授に就任され、平成18年には現在の花崎和弘先生が3代目教授に就任されました。この10年間に教室で働く先生が漸減し、マンパワー不足の状態になっていますが、研究マインドを持った優秀な外科医(academic surgeon)を育成するという花崎教授の大目標の達成に向けて少数精鋭で頑張っている現教室員の先生方には頭が下がります。

この30周年を期に、高知大学外科学講座外科1が花崎教授のもと臨床、研究、教育のそれぞれの分野で意欲的に活動され、全国区の外科医局となりますことを祈っています。

ただ、先ほど言いましたように、臨床研修制度の導入をきっかけに全国的に医師不足が表面化していて、特に高知県は深刻な問題になっています。外科1の医局も例外ではなく新入医局員が少なく、増加する手術症例をこなすのにも支障を来す状況になっているようです。教室の目標を達成する為にはマンパワーが必須条件になります。関連病院の先生方には教室員の確保に絶大なご支援、ご協力をお願いしたいと思います。

関連病院代表

30周年祝辞

医療法人仁栄会 島津病院 理事長
島津栄一

高知大学医学部第一外科開講 30周年おめでとうございます。

この間に第一外科は学生を教育し、優秀な外科医を育て、診療では地域医療に尽くすとともに高知県の外科治療の指導的役割を果たし、高知県の外科医の知識技術ともに向上させました。また活発に研究され数多くの論文を発表して日本の外科学の向上に多大な貢献をしました。これらの業績を讃えるとともに尊敬いたします。

昭和53年4月高知医科大学開講に際し、岡山大学医学部第一外科より緒方卓郎先生が初代教授として就任されました。教室のスタッフの獲得を始め総ての事を新しく作るのは大変な御苦労だったと拝察いたしますが、緒方教授は56年11月大学病院の開院まえに17名の人材を揃え、診療を開始されました。

学生の教育・診療と多忙にもかかわらず、電子顕微鏡を駆使し、最先端の研究を行い多くの論文を発表されました。

緒方教授の研究に対する意欲は今でも変わることが無く、後進の医師の研究を指導されていますが、先日お会いした時も細胞の中で役割の不明であった部分の機能が解りかけていると興奮気味に話されている若さに感動しました。

緒方教授と私の師事した岐阜大学第一外科の稲田潔教授が同じ岡山大学で第一外科第二外科の出身で親しく、稲田潔教授が来高したとき紹介して頂いて以来高知医科大学第一外科に御世話になっています。

平成8年緒方教授が退官され、荒木京二郎助教授が教授に就任されました。

荒木教授は緒方教授の事業を引継ぎ優秀な教室員を育てました。現在多くの市や町で、第一外科の出身の先生方が大病院を造り、高度な医療を地域の人達に提供している姿は誇らしく思います。

平成18年4月荒木教授の後任に花崎和弘教授が選ばれ就任されました。

6月教授就任祝賀会に花崎教授にご縁のある多くの教授の中に能勢之彦教授が出席されていたのには驚きました。私は肝臓の体外環流に関する研究で学位を授与されており、人工臓器学会に度々発表していましたが、昭和45年頃の人工臓器学会において能勢教授が「人工心臓の現状」と題して特別講演をされ、それを拝聴したことがあり、また数多くの文献でもお名前を拝見していたからです。このような世界的権威のある能勢教授が高知にまで来て下さったのは、花崎教授の人徳の致すところと深く感銘いたしました。

花崎教授は、着任早々に「医学部をどう変えるか」と題する文章を教室員や関連病院に配布致しました。自己紹介から始まり、教室運営において守る5項目を述べ、最後に目指すのは first class department of surgery と書かれています。

その後も医局ニュースとして花崎教授の考えを述べ、全員に周知させていますが、その中で外科・消化器外科の指導医の必要性を説き、学位・専門医取得の方法を指導し、全員の motivation を高めようと努力されているのがよく判ります。

教授のこれらの努力が実り、2名の先生に学位が授与され、また多くの学会において教室から多数の研究発表がされており、この度の日本臨床外科学会でも杉本准教授が特別企画、岡林講師と秋森学内講師がシンポジストに選ばれていることは喜ばしい限りです。

花崎教授の開かれた教室の運営と強力な指導力によって第一外科が益々発展し、多数の優秀な外科医が育成されることに期待し、花崎教授のご健勝を祈念して祝辞を終わらせていただきます。

特別寄稿



高知大学医学部外科学講座外科1 開講三十周年を記念して

高知大学 学長
相良 祐輔

外科学講座外科1の開講三十周年を迎えられたことを、高知医科大学の創設に関わった者の一人としてしまして、また今日まで、その関わりの中で育てて頂いている者として、万感の想いをもって、心から、お祝いを申し上げます。

ご承知のように高知医科大学は新設であり、その発足に当たっては全国の大学から研究に個性が溢れ、しかし単に優秀であるだけでなく、加えて医人育成に相応しい見識を問われた方々が教官として迎えられました。一言にして言えば、「敬天愛人」の考えの下に集われた人たちで、その第一歩を踏み出したのだと思っています。「僕たちの前に道はない。僕たちの後に道はできる。」の想いが結集しての出発であったと言えます。

私事で恐縮ではありますが、教室の皆さんに、「私の医局ではない、君たちの医局なのだ。そして君たちだけの医局ではない。後輩のために医局はある。」とよく話したものであります。伝統のないところからの出発は、自分たちの一步一步、それぞれのものが伝統を創出していく行為なのだと思って欲しかったからであります。

今日、外科学1が三十周年を迎えられたことは、緒方卓郎、荒木京二郎両名誉教授と共に教室に関わられた多くの方々の歩みの歴史であり、それは今や外科学1の伝統に進化していると確信いたします。伝統とは、常に教室を構成しておられる方々の日常に育まれます。だからこそ花崎和弘教授を迎え、これまでの業績の上に、さらに新しきを求め、挑戦され、輝かしい伝統を創ろうとしておられます。学長という立場からは、そのことは的確に観察できますし、この上ない感謝であります。

高知大学医学部外科学講座外科1の洋々たる未来に栄光あれと、心から祝意を表させていただきます。



30周年に寄せて

高知大学医学部附属病院 病院長
倉本 秋

仁淀川町に暮らす父は、昔から、山を買い、植林をするのが好きだった。四国電力に勤めていて、2年に1回くらいのペースで県内外を巡る転勤族であったが、私の学校休みには必ず仁淀川町の田舎の山と一緒に手入れに廻った。今も鮮明に思い出することができる父の声、「この檜が5千円、あの杉は2千円---」、50年近く前の物価での話である。父の話を聞きながら私は子供心に、「5千円×ウッ千本、2千円×ウッ千本、ヨーシ、大人になったら働かずに暮らしていける」とほくそ笑んだものである。

結末はみなさんをご存知の通り、輸入材に席卷された国内の木材市場は無惨な骸（むくろ）をさらしている。木を切り出す手間賃ほどの対価も得られず、林業には灯火もない。必然的に私は、ギリギリに共感を覚えながら働き続けるしかない。「約束の地」という言葉がある。しかし成果を实らせる約束の地もあれば、荒れ放題になる土地もあるということだろう。

「大学ができれば、教室が開設されれば、立派な外科医が育つ」、それは約束の地に似た幻想である。土地も大切、木を植える人も大切、間伐をし、枝打ちをする人も大切である。さらに市況、時の運が宿るときに、外科学教室は幾多の精鋭を輩出することができる。高知大学医学部外科学講座外科1教室が30年の時を経て、そのような時代を迎えられたことに慶賀の意を、そして支え

てこられたみなさんには敬意を表したい。

今、外科1には肝胆膵、消化管、乳腺という、見かけ、大きな樹木が立っている。小児外科という小さな、しかし重要な木もある。見かけは大きな樹木を大黒柱にするものは「育てる気持ち」と「科学するところ」だと信じる。

次世代を育てる気持ちはこれまでは、教える情熱と表現されることが多かった。外科系の教育では特に、背中を見せる技量を、若手医師が陽炎に呼ばれるように追いかける必要があった。外科1には、個人個人の能力を見ながら、学び、経験する場を提供する精神が浸透しつつある。目配り、制限付き自由行動、支援、命綱付き実践、さまざまな「能力と自立度のバランス」に気を配っていることが見て取れる。指導的な立場にある人たちが、その中でまた自分たちも育つことに気づいているからだと思う。

科学するところは、次世代が育つ過程で身につける手術手技そのものについても、患者さんを診せていただく中で生まれる疑問に対する解決法についても言える。どうか今日の教科書を鵜呑みにしないで、新しい真実を見つけ出しただきたい。教科書的な事項を信じ切って、自らの手術手技に引きこもる樹木は、立ち枯れることを待つばかりである。アカデミズムのない外科など存在しないこと、そして同時に、患者さんの無用なリスクを代償にする外科はアカデミズムの対極にあることを肝に銘じていただきたい。

最後に、木材市況と異なって、教室の時の運はあなた任せで巡ってくるわけではない。旗を掲げる指導者がつかみ、教室員全員で沸き立たせるものであることを証明する今後を期待したい。



外科1 講座 30 周年記念に寄せて

高知大学 医学部長
橋本浩三

外科1 講座の開講 30 周年誠におめでとうございます。

初代の緒方卓郎教授、それを引き継がれた荒木京二郎教授、そして現在の花崎和弘教授の3人の指導者の下で、講座が発展してこられましたことに心から敬意を表したいと思います。私が高知医科大学に赴任したのは、17年近く前のことですが、今日まで教授会でこの3人の教授の方々と共に医学部の運営に従事させて頂くことが出来ました。緒方教授は教室の立ち上げからその充実に精力的に取り組まれました。荒木教授時代の後半から国立大学医学部は大きく変革せざるを得なくなりました。その中で荒木教授は教室の運営の傍ら、平成15年10月の高知医科大学と高知大学の統合や教員の評価システムの確立に尽力されました。

医学部はここ5年位の間にたいへん大きく変化しました。高知大学との統合に続く平成16年4月の国立大学法人化により、国立大学も財政的には自助努力を強いられるようになりました。附属病院の経営面の改善にも各診療科の貢献が求められています。また、平成16年4月から導入された卒後の初期臨床研修制度は、急激な地方国立大学のマンパワー不足とそれに伴う地域医療機関における医師不足を引き起こしました。そのため現在当医学部の各講座は大変厳しい状況におかれています。このような厳しい状況下で平成18年4月に着任された花崎教授は、その優れた外科診療能力と人間性により着任後1年目から手術件数や外来患者数を大幅に増加させ、病院収益への多大な貢献をされています。研究面でも、人工臓器を用いた糖尿病患者の術中管理の向上などユニークな研究テーマで成果を上げられています。他講座と同様マンパワー不足の中、診療と研究の両面の発展を目指して、大変な努力をされておられることは学内の誰もが認めているところです。

教育面においてもさまざまな取り組みをされています。昨年は高校生を対象にした外科手術の体験セミナーを開催され、県内の医学部志望の高校生に外科に対する興味を喚起させる企画をされました。今年は全国の医学部5年生を対象とした、- 消化器・乳腺内分泌・小児外科 - 見学ツアーセミナーを企画され、将来の外科医の希望者を増やすことに情熱を注いでおられます。

初期臨床研修制度の導入以来、基礎系講座のみならず、臨床系講座への入局者が極端に減少しています。この状況が続くと、医学部が担うべき機能を果たすことが不可能となり、医学部の崩

壊にも繋がりますので、研修医の帰学率を改善する（入局者を増やす）ため若手教授からなるワーキンググループを立ち上げ、花崎教授に座長への就任を依頼しました。私は花崎教授のご手腕に医学部の将来を託させて頂いた次第です。

優れた花崎教授の下で外科 1 講座が益々発展し、それが医学部全体の発展にも結がることを祈念しています。



開講 30 周年をお祝いして

高知大学医学部 医学科長
橋本 良明

外科学講座外科 1 教室の開講 30 周年を心からお慶び申し上げます。

貴教室の歴史は、緒方卓郎名誉教授による昭和 53 年 4 月の開講に始まるわけですが、高知大学医学部の前身である高知医科大学の昭和 51 年開学、昭和 53 年第 1 回入学式挙行、昭和 56 年までにおける学年進行に伴う臨床 14 講座の次々の開設という流れの中において、貴教室は最も早く開講された臨床 3 講座のひとつとして、まさに本学臨床医学教育の先鞭をつけた代表教室と申せましょう。これまで多くの俊英外科医を育成し、地域の医療に多大なる貢献をなされてきた緒方卓郎名誉教授および荒木京二郎名誉教授から、花崎和弘教授へと伝統のバトンが渡されて、今日開講 30 周年を迎えることができましたことは、同じ大学に身を置く同僚の一人として大いなる慶びであると共に、花崎教授主宰の下で、研究マインドを持つ優れた外科医の育成という大目標を定め、一層の発展を遂げんと未来に確固たる歩を進めておられる貴教室関係各位に満腔の敬意を表する次第であります。

貴教室における外科学の診療・研究成果が、地域や世界の医療・医科学の進歩に益々の貢献をされるよう期待して止みません。



外科学(外科 1)講座、開講 30 周年おめでとうございます

高知大学医学部外科学(外科 2)講座 教授
笹栗 志朗

外科学(外科 1)講座は、高知医科大学開学とともに開講された講座で、この間高知県の外科医療の中軸を担ってこられた歴史ある教室であります。初代緒方教授、2 代目荒木教授、さらに現花崎教授と歴史と伝統は引き継がれ、ますます発展の勢いを見せておられ、我々としても、分野は違え安閑としていられない気がいたします。

我が外科学(外科 2)講座の開講は遅れること 3 年の昭和 56 年で、私も初代田宮教授、小越教授に続いて 3 代目となります。私が高知へ赴任致しましたのは平成 11 年ですので、荒木教授、花崎教授とのお付き合いだけですが、その後、高知大学との統合、さらに法人化、また、新卒後臨床研修の開始など、様々な荒波が押し寄せ、特に地方大学に学生が残らなくなったことや、外科医を志望する研修医が全国的に激減していることなど、大学の外科教室を主宰することが大変困難な時期に至っております。幸い、荒木教授の時代より、両教室の交流は盛んとなり、合同カンファランスの開催や手術をお互い助け合うことにも自然と抵抗がなくなりました。また近年では、中高生向けの外科セミナーなど行事の共同開催も行っており、外科全体としてのまとまりがより一層できてきたことを大変喜ばしく思っております。

花崎教授の温厚なお人柄や、教室員の熱心な臨床・教育活動など、これからの高知大学医学部の発展にとって貴重な戦力となることは間違いないと確信しております。これからの貴講座のますますのご発展を心より祈念し、祝意と致します。



開講 30 周年を祝して

高知大学医学部消化器内科学講座 教授
日本消化器病学会 理事 大西 三 朗

高知大学医学部外科学講座外科 1 教室の開講 30 周年を心からお慶び申し上げます。

この度、花崎和弘教授が初代教授緒方卓郎先生、二代目教授荒木京二郎先生の築かれたアカデミズム溢れる外科教室を継承され、早くも人望の厚い先生の下に優秀な若い人材が結集しつつあります。ご教室の発展は磐石の構え、誠に祝着に存じます。

花崎教授とは日頃よりご厚誼を頂いておりますが、坂本龍馬を信奉する先生は誠実で男気のある心技体揃った見事な外科医と尊敬申し上げております。

消化器病の臨床、研究、教育において、消化器病外科と消化器内科は車の両輪であります。私どもの教室もこれから新しい人を迎え、貴教室と協力して本学の発展に尽くす所存でございます。今後とも何卒、ご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

最後に、外科 1 教室の益々の隆盛を願い、塩野七生の「ローマ人の物語」の中から、次の言葉を掲げてお祝いの詞といたします。「歴史はときに、突如一人の人物の中に自らを凝縮し、世界はその後、この人の指し示した方向に向かうことを好むものである。……」プルトルルト《世界史についての諸考察より》



開講 30 周年おめでとうございます

高知大学医学部麻酔科学講座 教授
真鍋 雅 信

開講 30 周年おめでとうございます。緒方名誉教授、荒木名誉教授、花崎教授、小林教授とすばらしい外科医の先生方と仕事ができます事は麻酔科医にとって望外の喜びです。

また、関連病院の先生方とも親しくさせていただいております。平成 3 年に山梨医科大学から参りました折にも、緒方・荒木両教授にお世話になりました。最近では、虫垂炎から腹膜炎を併発して激痛に耐えられず、救急車で自宅から附属病院まで搬送後、治療してくださったのも先生方でした。

おかげ様で臨床麻酔や若手医師の指導育成も担当できるまでに回復しました。

外科 1 同門会の皆様にも、この場をお借りして御礼申し上げます。

今後とも、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



医療管理学教授・がん治療センター部長就任のご挨拶と近況報告

高知大学医学部医療学講座医療管理学分野 教授
小 林 道 也

平成 18 年 11 月 1 日付けで医療学講座医療管理学分野教授と同時に都道府県がん診療連携拠点病院のなかで重要な役割を担うがん治療センターの部長を仰せつかりました。同門会の先生方に一言ご挨拶申し上げます。

私は昭和 59 年に高知医科大学を一期生として卒業後、その大半を消化器外科医として主に癌診

療に従事してまいりました。特に最近では腹腔鏡下手術を代表とする消化管癌の低侵襲手術と臨床研究に基づいた消化器癌化学療法を専門としております。現在、医療管理学分野の仕事とがん治療センターの仕事に加えて外科の外来、手術、回診、講義などのこれまでの仕事もこなしていかなければならず、これまで以上に多忙な毎日を送っています。

医療管理学というのは耳慣れない言葉ですが、その守備範囲は広く、医療安全管理、栄養管理、感染対策、褥瘡予防、医療経済、医療行政など多くのことが含まれております。いずれにいたしましてもこれらはすべて患者さんが安全で安心な医療を受けることができるようにするため、と同時に医療者側が安心して安全な医療を提供することが出来るようにするためであります。現在の高知大学附属病院は開院当初から比べるとはるかに患者さんに優しい医療を提供できていると思います。しかしながら、これには上限はないと考えております。さらに良い医療を提供できるようお手伝いをし、ひいては地域医療に貢献していきたいと思っております。現在、医療管理学にはスタッフもなく、すべての分野にわたっての活動はなかなか出来ないのが現状です。既存の各医療チームと連携をしながら少しずつこなして行こうと思っております。そのため今後、皆様方のお力添えをお願いすることが多いかと存じますが、なにとぞよろしく願いいたします。

がん治療センターにつきましても、新しい建物があるわけでもなく、その上がん治療センターの仕事は？と聞かれますと、なかなか明確にお答えするのは難しいのが実情です。現時点では既存の癌治療に関する部署、チームの方々と連携を取りながら安全で確実、質の高い癌治療を遂行できるようコーディネートしていくことを重要な役割と考えております。たとえば、緩和ケアチーム、栄養サポートチーム、外来化学療法室などの連携により、患者さんの QOL の向上を図ることです。

がん治療センターとして早急に軌道に乗せていかなければならない重要な問題は院内のがん登録です。これは公衆衛生学教授の安田誠史先生のご指導のもと、各診療科のご協力をお願いしているところです。また、癌治療成績をとりまとめこれを公開する情報提供体制を整えていかなければなりません。簡単な様で、もしかすると最も大変なことではないかと思っております。治験の推進も重要な点ですが、このためには日頃からの着実な臨床研究がなければなかなか癌領域での治験を獲得するのは難しいというのが私の持論です。このたび「進行・再発大腸癌に対する分子標的薬の phase II の治験」を実施することとなりました。これは欧米とほぼ同時に施行されるもので四国では高知大学のみが選ばれました。これも日ごろから私たちが行っている着実な臨床試験の賜物と自負しております。この開発治験は日本国内の大腸がんで苦しんでいる患者さんを救うため、必ず成功させなければならない重要な案件です。おそらく何年か後に日本でも使用することができるようになるはずの薬です。いろいろ条件があり、ご希望の患者さん全員に投与することはできないかもしれませんが、患者さんがいらっしやいましたらぜひ一度お問い合わせください。

一方、来年春から本格的に「がんプロフェッショナル養成プラン」が始まります。本学は岡山大学を中心とした中国、四国の 8 大学のコンソーシアムに加わっております。文部科学省からの助成金でがん薬物療法専門医、腫瘍外科医、放射線治療医、緩和療法医、がん専門薬剤師、医学物理士、がん専門看護師、がん専門栄養士を養成する新しい大学院制度です。高知県では高知大学と高知女子大学が参加しています。5 年間のプロジェクトですが、結果をきっちりと出していかなければ補助金もいただけない仕組みで、大学全体がその意識を持って協力していかなければならないものです。少しでも多くの、質の高いがん専門の医師、コメディカルの養成をして高知県内全域にわたるがん診療の質の向上を目指していきたいと思っております。

また、近々各科横断的な癌のカンファレンスを構築したいと思っております。これはがん治療センターができる前から私自身で夢に描いていたことです。最近のがんプロフェッショナル養成プラン、がん診療連携拠点病院などの新しい取り組みの上では必須のこととなっております。押し付けではなく、スタッフ皆が進んで参加できるような実りの多いカンファレンスにしていきたいと思っております。

これらがある程度軌道に乗ってまいりましたら、現在、がん専門薬剤師養成、がん専門分野における質の高い看護師養成事業などにご協力させていただいておりますが、より一層地域医療機関のスタッフへのリカレント教育体制を充実させ、さらに地域の医療機関との連携をはかり、癌治療に関する臨床研究を推進していかなければならないと思っております。その一環として、附属病院における「高知県低侵襲手術教育・トレーニングセンター」の開設準備をするよう病院長よ

り命じられました。鏡視下手術、IVR、日帰り手術などを教育・実施するセンターを目指しております。

また、高知県民への癌予防・治療に関する啓発活動も大切な仕事の一つです。これまでも学内での会議、委員会への参加は多かったのですが、当然のことながら最近これらがさらに増えております。また、特にがん対策基本法施行によりがん治療センター部長として県などの行政や患者会との会議、高知県の「がんワーキンググループ」やがん対策推進条例に基づく「高知県がん対策推進協議会」などの会議に参加し、高知県のがん対策基本計画策定とがん対策の充実のため、お手伝いをさせていただいております。さらに高知県国保審査会の審査員も引き続きつとめております。

また医学部の国際連携推進委員会委員長をおおせつかり、本学の国際交流推進委員会の委員として毎月朝倉キャンパスでの会議に参加しております。この会議は主に国際交流における大学間の協定について審議する会議です。医学部はこれまで中国のチャムス大学などと協定を交わし学生、研究者の交流をしていることはご存知のことと思います。本稿ではまだ大学間協定の締結には至ってありませんが最近活発な交流が始まったハワイ大学医学部について少しご紹介させていただこうと思います。

私が初めてハワイを訪れたのは1978年です。1979年からはホノルルのKuakini病院病理部の(故)林卓司先生のもとを毎年のように訪ねるようになりました。当時からハワイ大学医学部の教育(アメリカの医学教育)に興味を持ち、いつかここへ留学してみたいと思っていました。縁あって1986年から1988年にかけてハワイ大学で勉強する機会を得たわけですが帰国後も数年間にわたって本学の学生がハワイ大学の臨床実習に参加できるよう個人的にお手伝いをしておりました。このたび、医学部として正式にハワイ大学医学部との交流をお手伝いさせていただくことになりました。平成17年6月、井上新平先生、植田味佐先生とホノルルを訪れ本学医学部とハワイ大学医学部との交流を模索しました。お二人の努力の甲斐あってまず、平成18年6月にハワイから医学部学生3名が研修のため本学を訪れました。平成19年にも3名のハワイ大学学生が本学で研修をしております。この際には各教室の先生方に大変お世話になりましたことをこの紙面をお借り致しまして改めてお礼申し上げます。また、本学からは平成18年、19年の2年間、8月にハワイ大学医学部のプログラムに参加しております。これはハワイ大学医学部のOffice of Medical EducationのDr. Gordon Greeneのプログラムで、平成20年3月にも本学学生がハワイ大学医学部で研修をする予定となっております。またこれ以外にも東海大学がホノルルで主催する医学英語のセミナーにも数名の学生が参加しています。これら2つの交流は現在順調に続いております。さらにもう一つハワイ大学医学部副医学部長のDr. Satoru Izutsuのプログラムがあります。これは私の留学しておりましたKuakini病院での4週間の臨床実習です。平成19年1月に本学学生が1名参加し、高い評価をいただいております。先日、ホノルルでDr. Ruth Ono(Queen病院の前副理事長、ハワイ大学名誉理事)、Dr. Izutsu、Dr. Greeneにお目にかかり今後の交流についてお願いとお考えをお聞きしてきました。正式な回答ではありませんが今後、TOEFLの成績を見てもう一名Kuakini病院での臨床実習学生を受け入れていただけるとのことで、この学生の交流がうまく行けば医学部間での協定も可能性があるとのことでした。さらにUSMLEのstep1と2の試験に合格していることが条件にはなりますが、ハワイの病院での臨床研修の可能性も示していただきました。私が20数年前に夢見たことが手の届く目の前に来ていることを実感しています。ハワイ大学は全米でも医学教育の盛んな大学です。そのハワイ大学と本学の交流がますます盛んになり、学生さんのみならず研究者の交流も実現するよう努力していきたいと思っております。

私の外科医としての仕事以外の一部をご紹介させていただきました。

高知医科大学第一期生としての誇りをもって、これまでの経験を活かして、母校の発展に少しでも寄与していきたいと思っております。

教室の変遷

年 表

	大学のあゆみ	入局者	教室のあゆみ
1978年 (昭和53年)	学長:平木潔 副学長:俵壽太郎、森本正紀 昭和53年度入学試験実施。 8講座(解剖学、生理学、医化学、病理学、環境保健医学、内科学、小児科学、外科学)及び7学科目(文学、政治学、物理学、化学、生物学、英語、ドイツ語)を開設。 第1回入学式。 第1回教授会開催 開学記念式典	緒方卓郎、清藤敬、川村明廣	4月1日 高知医科大学第1外科教室開設 岡山大学第1外科教室緒方卓郎講師が初代教授として就任 (1978年4月1日~1996年3月31日) 助教授清藤敬就任、川村が入局第1号となる
1979年 (昭和54年)	管理棟及び基礎・臨床研究棟竣工。 3講座(薬理学、神経精神医学、産科婦人科学)2学科目(心理学、数学)を開設	田村精平、高田早苗 S54.4.1 医局長:田村精平	4月 研究室の備品配置等を行い、形だけは研究室として整う 11月24・25日 中四国医学会小児外科学会 12月17日 忘年会(ニュー門田)
1980年 (昭和55年)	附属図書館竣工。 6講座(免疫学、微生物学、法医学、皮膚科学、放射線医学、泌尿器科学)開設。 附属病院竣工(臨床講義棟、病棟、中央診療棟、外来診療棟)	井関恒、山崎奨、山中康明、曳田知紀、辻豪、赤岩務、川村達夫、松浦喜美夫、白井隆	1月18日 医局新年会(紋別) 新入局者は高知県立中央病院にて研修 5月19日 医局抄読会開始(毎週月曜日 18:30) 5月20日 新入医局員歓迎会(城西館) 8月2・3日 医局旅行(南宇和海国立公園) 12月19日 医局忘年会(本池沢)
1981年 (昭和56年)	2月17日平木潔学長死去 学長:森本正紀 副学長:尾崎文雄、俵壽太郎 6講座(老年病学、麻酔学、整形外科学、眼科学、耳鼻咽喉科学、脳神経外科学)開設。 附属病院開院	金子昭、川崎博之、山本恒義、森田莊二郎	4月28日 新入医局員歓迎会(司) 8月1・2日 医局旅行(鳴門) 10月19日 医大病院診療開始、3W病棟、第1外科、脳外科、眼科、麻酔科、放射線科の混合病棟で第1外科は35床からのスタートとなる 12月25日 医局忘年会(ニュー門田)
1982年 (昭和57年)		荒木京二郎、北川尚史	7月31・1日 医局旅行(足摺岬) 8月28・29日 高知県医師会学会 9月6日 第1内科との合同カワルシ開始 10月24日 病棟3Eに引越し 45床 手術も8単位/weekとなる 12月17日 医局忘年会(得月楼)
1983年 (昭和58年)	附属動物実験施設設置	公文正光、上岡教人、中井邦博	1月14日 医局新年会(土佐っ子) 1月18日 高知外科会(本年主催となる) 5月31日 清藤敬助教授退職 8月1日 荒木京二郎講師、助教授就任 8月6・7日 医局旅行(井ノ岬温泉) 12月23日 医局忘年会(ホテルサンルート)
1984年 (昭和59年)	大学院研究棟竣工。 高知医科大学第1回卒業式。	阿部哲朗、久礼三子雄、小林道也、橋本祥恪、山下邦康	5月18日 新入医局員歓迎会(司) 6月18日 大学院棟完成し、医局員の増加により医局を院棟に移転する。

	附属実験実習機器センター設置。 大学院医学研究科設置		7月28・29日 医局旅行(東洋町白浜) 12月14日 医局忘年会(得月楼)
1985年 (昭和60年)	附属医学情報センター設置。 中国佳木斯医学院と姉妹大学協定締結	計田一法、杉藤正典、杉本健樹、近藤雄二、伊与木増喜、柴岡義人、森村豊 S60.7.1 医局長:山下邦康	1月31日 第1内科との合同新年会(花壇) 5月10日 新入医局員歓迎会 7月27・28日 医局旅行(小豆島) 11月 公文正光 Dr. 第27回日本消化器病学会大会(松山)にてシンポジウム発表 12月20日 医局忘年会(三翠園)
1986年 (昭和61年)	学長:俵壽太郎 副学長:喜多村勇、伊藤憲一 附属病院に救急部設置	尾形雅彦、浜田伸一	1月1日 医局新年会(教授宅) 2月1・2日 医局スキー旅行(美川) 6月6日 新入医局員歓迎会(鶴巴良) 7月26・27日 医局旅行(大洲) 12月12日 忘年会(井川)
1987年 (昭和62年)	高知医科大学同窓会設立。 歯科口腔外科学講座開設	白石哲夫、高野篤、森田雅夫、山本拓	1月1日 医局新年会(教授宅) 1月31・1日 スキー旅行(美川) 6月5日 新入医局員歓迎会 7月25・26日 医局旅行(阿南市) 12月4日 医局忘年会(井川)
1988年 (昭和63年)	第1回大学院医学研究科学位授与式。 附属病院に輸血部設置	中野琢巳、秋森豊一、氏原孝司、谷崎裕志、別府敬、中村生也	1月1日 医局新年会(教授宅) 4月11日 医局花見(高知城) 5月28日 新入医局員歓迎会(新阪急ホテル) 7月23・24日 医局旅行(岡山) 11月3日 医局野球対抗試合(小児科に快勝) 12月2日 医局忘年会(うめだ)
1989年 (昭和64年) (平成元年)	臨床検査医学講座開設。 第1回公開講座実施	遠近直成、古屋泰雄、松嶋政規、奥宮一矢、柏井英助、河合秀二、小濱祥均、山本真也 H1.4.1 医局長:松浦喜美夫	4月1日 花見(高知城) 5月26日 新入医局員歓迎会(鶴巴良) 3月11日 開講10周年記念式典(高知花壇) 7月29・30日 医局旅行(とんぼ公園・足摺岬) 12月1日 医局忘年会(臨水)
1990年 (平成2年)	医学科の定員を100人から95人に改正。 第42回西日本医科学学生総合体育大会(西医体)を本学で開催	吉川健、山中幸二、間島國博	1月1日 医局新年会(教授宅) 2月11・12日 スキー旅行(美川) 6月9日 新入医局員歓迎会(濱長) 7月28・29日 医局旅行(淡路島) 10月 緒方教授第35回日本電子顕微鏡学会にてシンポジウム発表 12月7日 医局忘年会(土佐御苑)
1991年 (平成3年)	附属病院開院10周年記念式典	安藤徹、直木一朗、並川努	5月17日 新入医局員歓迎会(井川) 2月9・10日 スキー旅行(美川) 7月27・28日 医局旅行(奥道後温泉) 11月 久礼三子雄 Dr. 第60回日本消化器内視鏡学会中四地方会合同教育にてシンポジウム発表 12月7日 医局忘年会(臨水)
1992年 (平成4年)	学長:喜多村勇 副学長:瀬戸勝男 池田久男 入学試験に分離分割方式を導入。 カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学医学部と学術交流協定を締結。 週休2日制を導入	泉山史貴、大海研二郎、岡本健、吉本忠、西谷周作	1月1日 医局新年会(教授宅) 2月1・2日 スキー旅行(美川) 2月29・1日 スキー旅行(大山) 4月3日 花見(高知城) 5月 緒方卓郎教授 日本電子顕微鏡学会より瀬藤賞を受賞 5月30日 新入医局員歓迎会(国際ホテル) 7月11日 緒方卓郎教授瀬藤賞受賞祝賀会(オリエントホテル) 7月25・26日 医局旅行(高松) 10月9日 第67回中国四国外科学会総会開催(新阪急ホテル) 小林道也 Dr. 同会にてワークショップ発表 12月5日 医局忘年会

1993年 (平成5年)	保健管理センター設置、附属病院に周産母子センター設置。第1回医学教育方法の改善に関するワークショップ開催	小林昭広、谷口寛、駄場中研、水嶋秀	4月2日 5月15日 6月 6月22・23日 7月31・1日 12月4日	花見(高知城) 新入医局員歓迎会(新阪急ホテル) 第1回小林孫兵衛記念医学振興財団助成金(小林道也 Dr.) 国際放射線腫瘍学会 医局旅行(小豆島) 医局忘年会(けまり)
1994年 (平成6年)	附属病院が特定機能病院に指定される。国際交流会館竣工。新カリキュラム実施。看護学科設置準備室開設。放送大学と単位互換協定締結	筒井哲也、松岡尚則	2月11・12日 5月14日 6月 10月5・7日 10月22日 12月3日	スキー旅行(美川) 同門会発起人会 新入医局員歓迎会(国際ホテル) 第2回小林孫兵衛記念医学振興財団助成金(小林道也 Dr.) 第26回日本臨床電子顕微鏡学会開催(県民文化ホール) 第33回中四國小児外科学会開催(高松) 第1回同門会総会 医局忘年会(三翠園)
1995年 (平成7年)	阪神・淡路大震災救援活動。学内LAN運用開始。附属病院にリハビリテーション部設置	尾崎信三	6月3日 6月 10月18日 12月2日	第2回楷風会総会・学術講演会 新入医局員歓迎会(新阪急ホテル) 第3回小林孫兵衛記念医学振興財団助成金(小林道也 Dr.) 緒方卓郎教授 日本臨床電子顕微鏡学会より安澄記念賞を受賞 忘年会(新阪急ホテル)
1996年 (平成8年)	高知5大学学長協力会議発足	大川尚臣、永野克二、向後正幸、高山悟	3月 3月31日 4月1日 4月14日 6月15日 7月27・28日 10月1日 12月7日	緒方卓郎教授最終講義 緒方卓郎教授定年退職 荒木京二郎助教授が教授に就任(1996年4月1日～2006年3月31日) 緒方卓郎教授退官記念祝賀会(高知新阪急ホテル) 荒木京二郎教授就任祝賀会(高知新阪急ホテル) 医局旅行(岡山) 松浦喜美夫講師が助教授就任 楷風会総会・第3回学術講演会 忘年会(サンライズホテル)
1997年 (平成9年)	附属病院に総合診療部設置。高知県内4大学及び放送大学間の単位互換に関する協定調印	岡林雄大、小高雅人、森一水、都築英雄	1月1日 5月24日 6月 10月26日 12月6日	医局新年会(第一ホテル) 第4回楷風会総会・学術講演会 新入医局員歓迎会(新阪急ホテル) 第5回小林孫兵衛記念医学振興財団助成金(小林道也 Dr.) 医局旅行(別府峡でバーベキュー) 忘年会(濱長)
1998年 (平成10年)	学長:池田久男 副学長:小越章平、相良祐輔 大学病院衛生医療情報ネットワーク(MINCS-UH)開局。看護学科設置、学科目情報科学開設。開学20周年記念式典。高知医科大学ホームページ開設	森直樹、中谷肇、田中純一、大木章	5月9日 6月 7月25・26日 9月18日 12月5日	第5回楷風会総会・学術講演会 新入医局員歓迎会(旭口イヤルホテル) 第6回小林孫兵衛記念医学振興財団助成金(小林道也 Dr.) 医局旅行(神戸) 安藤徹 Dr. 平成10年度日本臨床電子顕微鏡学会より和文論文賞受賞 忘年会(第一ホテル)
1999年 (平成11年)	医学科の入学定員を95人から90人、第3年次編入学定員を5人に改正。	野口智永、甫喜本憲弘、溝淵敏水	5月22日 7月3・4日 7月11日	第6回楷風会総会・学術講演会 特別講演:竹下公矢先生 新入医局員歓迎会(旭口イヤルホテル) 第71回日本消化器病学会四国支部例会開催(サンピア高知) 日本消化器病学会四国支部市民公開講座開催(福祉交流プラザ)

			6月 第7回小林孫兵衛記念医学振興財団助成金(岡本健 Dr.) 7月24・25日 医局旅行(しまなみ海道) 12月11日 忘年会(三翠園)
2000年 (平成12年)		安原清司、齋藤卓、 田村耕平、津野	3月30日 花見(高知城) 5月27日 第7回楷風会総会・学術講演会 特別講演: 島村善行先生 新入医局員歓迎会(三翠園) 6月 第8回小林孫兵衛記念医学振興財団助成金(小林道也 Dr.) 7月29・30日 医局旅行(新居浜・石鎚山) 12月9日 忘年会(鶴巴良)
2001年 (平成13年)	看護学科棟竣工	藤原千子	1月20日 第21回四国食道疾患研究会開催(ホテルサンルート) 5月19日 第8回楷風会総会・学術講演会 特別講演: 二宮基樹先生 新入医局員歓迎会(旭ロイヤルホテル) 6月 第9回小林孫兵衛記念医学振興財団助成金(小林道也 Dr.) 7月28・29日 医局旅行(剣山、かずら橋) 9月22日 日本消化器病学会四国支部第3回教育講演会開催(ホテルサンルート) 12月1日 忘年会(三翠園)
2002年 (平成14年)	第1回看護学科卒業式。 大学院医学研究科を 大学院医学系研究科 に改組。 医学部アトミッショ ンセンターを設 置。 医学部附属病院に 光学医療診療部を 設置	島津佐吉子	1月13・14日 スキー旅行(大山) 1月16日 第30回中国四国甲状腺外科研究会開催 (ホテルサンルート) 5月18日 第9回楷風会総会・学術講演会 特別講演: 杉藤正典先生 小野正人先生 新入医局員歓迎会(新阪急ホテル) 6月 第10回小林孫兵衛記念医学振興財団助成金(小林道也 Dr.) 7月13・14日 医局旅行(安芸の酒蔵めぐり) 11月 小林道也 Dr. 第78回日本消化器病学会 四国支部例会にてシンポジウム発表 12月7日 忘年会(三翠園)
2003年 (平成15年)	医学部附属病院の 第1外科、第2外科 を外科に再編。 旧高知大学と旧高 知医科大学を統合 し、高知大学が開 学	市川賢吾、北川博之 H15.4.1 医局長: 小林道也	1月12・13日 スキー旅行(大山) 3月1日 第27回四国臨床栄養研究会開催(ホテルサンルート) 3月11日 第1外科と第2外科が統合され、附属病院では外科がひとつになる 5月 古屋泰雄 Dr. 第65回日本消化器内視鏡学会総会にてワークショップ発表 5月17日 第10回楷風会総会・学術講演会 特別講演: 今井章介先生 新入医局員歓迎会(新阪急ホテル) 8月 小林道也 Dr. 第78回中四外科学会にてシンポジウム発表 9月13・14日 医局旅行(禰原、天狗高原) 10月1日 松浦医局長 仁淀病院院長就任 12月6日 忘年会(三翠園)
2004年 (平成16年)	国立大学法人高知 大学開学 学長: 相良祐輔		1月11・12日 スキー旅行(大山) 4月1日 小林道也講師が助教授就任 5月29日 第11回楷風会総会・学術講演会 特別講演: 宇山一朗先生(三翠園) 9月 小林道也 Dr. 第79回中四外科学会総会 にてシンポジウム発表 9月25・26日 医局旅行(金比羅宮) 12月4日 忘年会(三翠園)
2005年 (平成17年)			1月9・10日 スキー旅行(大山) 6月4日 第12回楷風会総会・学術講演会・懇親会 特別講演: 仁尾義則先生(新阪急ホテ

			6月 9月9・10日 9月17・18日 12月3日	ル) 岡林雄大 Dr. 第 83 回日本消化器病学会 四国支部例会にてシンポジウム発表 第 80 回中国四国外科学会・第 10 回中国 四国内視鏡外科研究会開催(かるぼー と) 医局旅行(セントラルパークと姫路城) 忘年会(三翠園)
2006 年 (平成 18 年)	PET センター、院内保 育所設置。 医学部附属病院にが ん治療センターを設 置。 都道府県がん診療連 携拠点病院に指定	辻井茂宏、吉岡龍二、 前田広道 H18.11.1 医局長:杉本健樹	3月31日 4月1日 4月 5月13・14日 6月3日 7月3-7日 8月 10月28・29日 11月1日 11月 11月 11月10日 12月2日 12月	荒木京二郎教授定年退職 長野県厚生連篠ノ井総合病院より花崎 和弘先生が教授に就任 平成 18 年度科学研究費(小林助教授) 四国マンモグラフィ技術講習会 花崎教授就任祝賀会(新阪急ホテル) PBL デモンストレーション開催(看護学 科棟) 学長裁量経費(花崎教授) 四国 TNT(栄養療法)研究会 小林道也助教授 高知大学医療学講座医 療管理学分野 教授就任 花崎教授第 44 回日本人工臓器学会大会 にてランチョンセミナー 杉本健樹 Dr. 第 16 回日本乳癌検診学会 総会にてワークショップ発表 前田広道 Dr. 第 68 回日本臨床外科学会 総会で“Freshman Award”受賞 第 13 回楷風会総会・忘年会(高知新阪急 ホテル) 高知大学高齢者医療 EBM リサーチセン ター調査研究(岡林雄大 Dr.)
2007 年 (平成 19 年)	附属病院にローソ ン、スターバックス 開店		1月27・28日 2月15日 3月1日 3月 4月 4月 4月 5月12日 6月 6月 6月 6月2日 6月 7月 9月 9月 10月 10月 11月 11月	外科手術体験キッズセミナー共同開催 (手術室) クリニカルパスセミナー開催(かるぼー と) 杉本健樹講師が助教授就任 教室年報創刊号発刊 厚生労働省モデル事業(杉本健樹 Dr.) 花崎教授第 107 回日本外科学会定期学 術集会にてランチョンセミナー 岡林雄大 Dr. 同会にてワークショップ発 表 第 14 回楷風会総会・懇親会(高知新阪急 ホテル) 花崎教授第 13 回日本家族性腫瘍学会に てシンポジウム発表 平成 19 年度科学研究費(花崎教授) 第 15 回小林孫兵衛記念医学振興財団助 成金(前田広道 Dr.) 日本消化器病学会四国支部第 11 回教育 講演会開催(高知大学医学部臨床第 3 講 義室) 岡林雄大 Dr. 第 19 回日本肝胆膵外科学 会にてランチョンセミナー 岡林雄大 Dr. 第 62 回日本消化器外科学 会学術総会にてシンポジウム発表 学長裁量経費(花崎教授) 共同研究(日機装社) 医学部長裁量経費(前田広道 Dr.) 共同研究(日本トリム) 杉本健樹 Dr. 第 17 回日本乳癌検診学会 総会にてワークショップ発表 杉本健樹 Dr. 第 69 回日本臨床外科学会

			総会にて特別企画発表 岡林雄大 Dr. 同会にてシンポジウム発表 11月 秋森豊一 Dr. 同会にてビデオシンポジウム発表 11月 12月 岡林雄大 Dr. 第 37 回日本肝臓学会西部会イブニングセミナー 12月15日 楷風会特別講演会・忘年会(ホテル日航高知旭ロイヤル) 講師：園尾博司先生 12月 岡林雄大 Dr. 膵臓病研究財団より研究奨励賞(研究助成)受賞
--	--	--	--

緒方教授時代



0 から始めた外科 1 教室 18 年のあゆみ

高知医科大学 名誉教授
緒方卓郎

外科学講座外科 1 教室が開講 30 年を迎えましたことを、関係した方々とともに心からお慶び申し上げます。

高知医大の広大な敷地の中に、教養棟と実習棟がポツンと立っていた創設の時を思うと、30 年の歳月が本当に夢のように流れ過ぎ去った気が致します。

本誌の創刊号に教室の 18 年の歩みを寄稿し、それと重複するところが多いのですが、私が担当させて戴いた最初の 18 年をふり返ってもう 1 回記載させて戴きます。

新しい教室を創設することは滅多に経験することはないと思います。しかし祖父の緒方正規が東大で日本最初の細菌学、衛生学教室を創設し、父緒方益雄が岡山医大(現在の岡大医学部)で、衛生学教室を創設したことを思うと、家系的に新しい教室を創設する運命があったのかも知れません。

私が担当させて戴いた 18 年のうち、最初の 2 年は教養棟の 2 階に私の机が一つあるきりで、全くの準備期間で、必要な時に高知医大に集まって会議を開くといった状態でした。その当時は大学全体に関する問題としては学生のカリキュラムの設定、大学内法規の設定や中央診療棟の設計でした。実験機種の選定といったことが主体であり、教室にとっての大きな課題は研究棟の設計であった。文部科学省の原案では研究棟は大体廊下の南側が居室部門、北側が実験部門ということになっていました。外科 1 教室は建物の中央を戴いたが、廊下の北側にエレベーターとそのラウンジがあるため、南側は広いが北側の実験部門は狭いという割り当てになっていました。将来大学院研究棟ができると大きな部屋を戴けると聞いていたので、研究室を分けると効率が悪くなる、将来医局員が増した時、大きな医局が必要だろうと考えて大学院研究棟の部屋を将来の医局にし、代わりに南側の居室部門に、組織培養、免疫組織化学、暗室、マイクローム室を設置し、北側には、透過、走査電子顕微鏡を購入することを想定して電顕室を作り、電顕を置く位置には床を耐震動性にして戴くことにしました。私の希望案を持って、施設課長さんとミーティングを重ねましたが、先生のところは金がかかりすぎると度々言われましたが、とにかく希望を叶えて戴く事ができました。

昭和 54 年に研究棟が完成すると、病院が開院するまでは、研究室とスタッフの充実が主体となってきました。岡大当時中央電顕の割り当て時間では十分な観察ができず本当に困った経験をしていました。幸い岡大当時、科学研究費で充てていた電顕用マイクローム等電顕周辺機器は、岡大から高知医大への移転の許可を戴いていたので、教室の準備資金の大半を投じて、中型の透過電顕をと走査電顕を購入した。この二つの電顕は 30 年経った今も、活躍してくれています。

スタッフの方は清藤助教授、田村、高田君が岡大から、秘書として坂本さん(現山本恒義夫人)、研究室では山崎君が主として走査電顕、高橋、矢野さんが透過電顕を担当してくれることになり、岡大で電顕の仕事をしていていた尾崎、今枝さんが高知まで来て指導をしてくれ、何とか電顕を主体とする研究室を動かすことができるようになった。

次に講義の準備を始めたが、私自身がノートを取るのが苦手で苦労したので、説明文を避けて必要事項と図を主体とし、講義を聴いて内容を理解していれば項目を記憶すればよいようなプリントを作成した。当時ワープロはなかったが、幸いに秘書の阿部さんが非常に読みやすい字を書いてくれたので、プリントは学生間で好評だったと聞いている。

ついで病院の開設の準備が始まった。病棟は最初西病棟のみで、我々の教室は将来東病棟が完成するとそちらに移転することとなった。この頃になると他大学を卒業した井関、山崎、山中、曳田、辻、赤岩、川村達夫、松浦、臼井の優秀な諸君が次々と入局してくれて、スタッフの方は十分充実することができた。また高知医大が開校した春に大阪医大を卒業したばかりの川村明廣君が私の官舎を尋ねてきて入局を申し込んでくれ、新卒としては第 1 号の入局をしてくれた。昭和 57 年には開講に伴う困難な時期に多大の貢献をしてくれた清藤助教授が都合で岡山に帰るこ

となり、同君の推薦で岡大に在局後、大阪医大の消化器外科に在職していた、とくに胃癌に詳しい荒木助教授が赴任してくれ、胃外科の方を主体に担当してもらうことになった。

昭和 59 年には待望の新卒業生が出て、小林道也、阿部、久礼、日大から橋本の 4 君が入局してくれた。ついで昭和 60 年には杉本、計田、杉藤、伊与木、近藤、61 年には尾形、濱田、62 年に白石、高野、森田、山本拓、63 年に中野、秋森、氏原、谷崎、別府、中村、平成元年に遠近、古屋、松嶋、奥宮、柏井、河合、小濱、山本真、2 年に吉川、山中幸、間島、3 年に安藤、直木、並川、4 年に泉山、大海、岡本、吉本、西谷、5 年に小林昭、谷口、駄場中、水嶋、6 年に筒井、松岡、7 年に尾崎君の優秀な諸君が次々と入局してくれ、第一外科の発展に多大の貢献をしてくれた。

また 58 年からは名秘書の池田さんが事務を担当し、63 年からは宮田さんが研究室に加わり多くの学位論文に献身的に貢献してくれたが、宮田さんは感謝され惜しまれつつ一昨年退職された。

病棟は一度に完成するのではなく、西病棟と中央診療棟が先にでき、1 年経ってから東病棟が完成するしくみになっていた。したがって第 1 外科は最初現在の半分の約 20 ベッドでスタートした。幸いごく短期間でベッドは満床になり、手術の方も順調に進行していった。病室をもってくれた医局員は、皆十分な経験者だったのでその点は安心して患者さんを任すことができたのは幸いであった。

開院の準備は、カルテの作製、日本の大学で最初に導入されたコンピューターシステムの対応など、スタッフの諸君のお陰で何とか準備することができた。外来棟では最初の案では、手術室はなかったが、岡大にいたとき、生検などを中央手術部でやると、非常に患者を待たせるなどの経験をしていたので、御願ひして、処置室で小手術が出来るよう変更して戴いた。

1981 年の 10 月 19 日に待望の病院が開設した。幸い、早い時期に満床になり、第 1 号の手術は簡単な胆石症で、術後順調に経過してくれて、ほっとしたと記憶している。治療面では放射線科の前田教授と共同で、手術中に開腹したままで腫瘍摘出後に放射線をかける術中照射を行うことにし、放射線部内に術中照射室を作って頂いて、食道癌、胃癌、直腸癌、膵臓癌等の症例に行った。食道癌などは世界最初の試みであったと記憶している。また術中照射の動物実験は、小林君に動物で照射した標本をハワイ大学の病理へ行って解析してもらった。

1982 年の 10 月からは東病棟が完成して、引っ越し 45 床のベットを戴くことができた。幸い集まってきてくれた医局員が経験豊富な優秀なメンバーばかりだったので安心して病棟を任せることができた。退官するまで大過なく運営できたことは本当に幸せであった。

次に東病棟が完成して 45 床の病室が揃った。研究棟の設計とは違って、詰所の配置を決める程度で比較的簡単な作業だった。有料個室を何とか南側にできないか要求してみたが、各階共通ということで北側になってしまったが、今でも一寸残念な気が残っている。

岡大にいたとき、恩師陣内教授と共著で“術前術後と合併症”という 500 頁ばかりの本を金原書店から出版した。幸いこの本は好評で、中国で海賊版までできたという話だったが、この本を執筆するため、術後合併症の本と、文献を読んだ経験と、新しくできた教室なのでとにかく合併症を少なくするよう心がけた。幸い麻酔科の先生方、手術部の看護師さん、1 外科の医局員、看護師さんの適切な管理のお陰で合併症は非常に少なく、また訴訟問題を起こさずに済んだことはこれ等の方々のお陰と深く感謝している。

学位論文は田村、川村君らに肝、膵の電顕の仕事をしてもらった。小林 A 君には術中照射の動物実験の解析でハワイ大病理に留学してもらった。一方、血管内に樹脂を注入して固まってから周辺組織を溶かして、血管の鑄型を作り走査電顕で観察する方法で、橋本君に虫垂、吉川君に胆嚢、リンパ管内に鑄樹を注入する方法で臼井君にヒトのリンパ節、山中君と杉藤君に犬の胃と大腸でこれ等組織中のリンパ流の流れを解析してもらった。この研究を基礎に癌がどのように拡大するか研究したかったが、完成できなかったことを今も一寸と残念に思っている。次に固定した組織を苛性ソーダ等に入れて不要な組織を除去して、残った組織を走査電子顕微鏡で観察する方法で、杉本君に正常胃、伊与木君に胃癌、森田君に甲状腺腫瘍、古屋君に大腸腫瘍等の研究をしてもらった。また胃の塩酸を出す壁細胞について、並川、直木、安藤、小林 B 君に研究してもらい、尾形君は H. pylori 菌、また久礼君には原子力間顕微鏡で、金子君は消化管吻合器、山本拓君は動注療法の研究をしてもらった。

一方、私自身も週末の空いた時間に電顕の観察を行ったが、岡大の 1 外が、脳外科もやっていた筋電図をやっていた関係で筋肉の研究も行っており、偶然脊椎動物の骨格筋は従来の赤筋（遅

筋) 白筋(速筋)線維のみでなく、第3線維中間型線維があり、またこれ等3線維間の運動神経終板の構造も異なることを発見し、その微細構造の研究が認められて、平成4年に臨床医として初めて日本電子顕微鏡学会の瀬藤賞を戴くことができ、同年7月に皆で祝賀会をして戴いた。また胃の壁細胞が、空腹時には細管小胞という膜系がなくなり、食事をすると分泌細管という膜系が著明に増加するので、前者が後者に移行するに違いないが、いくら調べても両者の膜系の結合がなくどうして移行するのか謎とされていた。走査電顕を使って両者の膜系の結合があることを証明した仕事や、胃潰瘍の再生上皮の研究など正常及び病的胃の微細構造の研究で平成7年に日本臨床電子顕微鏡学会の安澄賞を戴くことができた。

次に関連病院について記載させて戴くと文字通り0からの出発であった。

高知医大の一外科を拝命したときより、ジッツが0の教室に赴任することになったが、高知県のように東西に長い県では患者を送って戴くと共に、術後の管理をお願いせねばならず、また若い医師の研修のためにもぜひジッツを作らねばと考えて、開学当初よりできるだけたくさんの先生方にご挨拶をお願いするよう務めていた。

開学して間もなかったこと、現在エムアイエス高知社長の石田さんに西は宿毛、土佐清水、もう1回は室戸まで自動車まで連れて行って戴いて、途中を含めて特に内科外科の先生方に挨拶をして廻った。今でも御世話になったことについては石田さんには深く感謝しています。

県立中央病院院長の近藤先生が、岡大の同門であったことから、その御厚意で研修医を送らせて戴くことができ、また準公立のリハビリテーション病院の同門の国友院長に医員を雇用して戴き、民間病院では近森病院を皮切りに徐々にジッツを拡大していくことができた。一方、田村君が須崎市に、白井君が田野町に、川村君が窪川町に、公文君が野市町に次々と総合病院を開院してくれて、ジッツが増え地方医療に多大の貢献してくれたことは本当に嬉しいことであった。

平成元年に安芸の県立病院の外科医長のポストが空くという報せが届いた。早速当時医局長だった山下君と一緒に度々お願いに上がったが、結局当時手術部の助教授だった山下君自身が赴任してくれればOKという結論になってしまった。初めての県立病院医長のポストとはいえ、山下君には全く申し訳ないと思ったが、同君が行ってくれるというのでお願いすることにした。

現在の医師不足の時代と異なり、既存の大学は新設医大にはジッツを渡さないという雰囲気の時節だったので、県立病院の外科がジッツになったときは本当に嬉しかったと記憶している。

彼が赴任して数年たった時に県立宿毛病院の院長ポストが空くという情報が入ってきた。最初はどのような手を打ってよいのか見当がつかなかったが、思い切って直接交渉をしようと決意して、面識の全くなかった県の病院局長さんに電話して、面会の機会を与えて戴いた。その席で山下君は土佐清水の出身なので、宿毛でじっくり腰を落ち着けて頑張ってくれること、安芸病院で立派な実績のあること、山下君の後任と宿毛病院には第一外科としてできる限り優秀な人材を送る事を説明して帰ったところ、数日後に採用の電話を戴くことができた。山下君が宿毛に赴任してしばらくたって、着任間もない親類先の橋本県知事に山下君と同行して同君を紹介しておいた。それから数年経って、中村と宿毛の県立病院が合併して、県立幡多けんみん病院ができることになり、山下君がその実績と手腕を買われて院長に就任が決まった。そのお陰で県立幡多けんみん病院が高知医大の関連病院となり、1外科からも5名の医員を派遣することができることになった。この快挙は山下君のお陰と深く感謝している。

県外のジッツとしてがんセンター東病院におられた島村先生のお陰で同病院に研修医を引き受けて頂ける事になり、次々と研修医を送る事ができた。高知県外にもよい研修病院をと思ひ手掛け始めたが、間もなく定年になってしまい、この点は残念ながら十分には果たせなかった。

最後になりましたが、私の時代に関連病院になって下さった病院を列記しましょう。西から渭南病院、県立宿毛病院(後に県立幡多けんみん病院)、山崎外科整形外科病院、くぼかわ病院、大西病院、なかとさ病院、須崎くろしお病院、井上病院、橋本外科胃腸科病院、伊与木クリニック、高知県立中央病院、厚生年金高知リハビリテーション病院、近森病院、高橋病院、愛宕病院、松田病院、高知記念病院、凶南病院、高知生協病院、四国勤労病院(現いずみの病院)、第一病院(現だいいちリハビリテーション病院)、上町病院、高知いちょう病院、高知北病院、高知城東病院、島津病院、下村病院、竹下病院、山本内科外科医院、田岡病院(現早明浦病院)、高知刑務所医務室、藤原病院、吉川診療所、野市中央病院、県立安芸病院、田野病院、室戸病院、県外では国立福山病院、国立がんセンター東病院、岸和田久礼クリニック、半田外科病院、岩国みなみ病院。

さて教室のことに戻ると、優秀なスタッフの皆様のお陰で18年を無事終えることができた。

私個人の事を言うと、最後の年の夏には私の好きな足摺岬に教室の皆さんと思い出の医局旅行を行った。最後の年の3月には長年研究してきた胃の壁細胞と酸分泌機構、それに関係する消化性潰瘍、Zollinger Ellison 症候群、また Helicobacter pylori 菌等をまとめて最終講義を行わせて戴いて、終わると大過なく任務を終了したという実感が湧いてきた。

最後に第1外科に関係したすべての皆さんには大変な貢献をして戴き、御世話様になったが、紙面の関係で殆どの方が名前を挙げたにとどまり、あるいは名前すら挙げられなかった方々もあり、申し訳なく思っているが御容赦をお願いしたい。今ここに18年を振り返ってみると、何故もっと丁寧に面倒をみてやれなかったかと思うし、教室のことも不十分なことばかりで全く申し訳なく思っている。

幸い一昨年の春、肝、胆、膵外科が専門の新進気鋭で実行力に富む花崎教授が就任され、また小林君が医療学講座医療管理学分野教授に就任して消化管外科を担当し、昨年の4月からは杉本君が准教授に就任して内分泌外科を担当することになり、希望に満ちた前進が期待されることになった。

最後に高知医大第1外科、今は名前が変わった外科学講座外科一教室とその関連病院の皆様の益々の御発展を心から祈念して筆を置かせて戴くこととする。

緒方卓郎先生は、平成20年1月30日、77年にわたる生涯を閉じられました。

私ども一同、ここに深く追悼の意を表すとともに、ご遺族の皆様にご心からお悔やみ申し上げます。

花崎 和弘

高知大学外科学講座外科1開講 30周年に寄せて

須崎くろしお病院 院長
初代医局長 田村 精平

高知大学外科学講座外科1の開講 30周年、おめでとう御座います。当初から参画しましたOBの一人として、大変感慨深いものがあります。

初代緒方卓郎教授のもと当時高知医科大学第一外科が開講されたのは、昭和53年4月でした。

私は高田早苗先生と岡山大学から昭和54年4月に高知に帰ってきて、高知医大第一外科に入局しましたが、一年前の昭和53年4月には大阪医大出身の川村明廣先生が入局第1号として入局していました。

昭和54年4月1日私が初代の医局長を拝命しましたが、川村先生は外の病院に出ており、医局には緒方教授、清藤助教授、高田先生と私だけでネーベン先の病院で臨床をする合間に研究室の整備に明け暮れていました。

昭和55年には井関恒、山崎奨、山中康明、曳田知紀、辻豪、赤岩務、川村達夫、松浦喜美夫、臼井隆各先生が次々と入局してくれました。新卒の先生方は県立中央病院で研修させていただきました。5月からは医局抄読会を開始し、月曜日の夕方、出先の病院から皆が医局に集合し楽しく勉強会を始め、医局の形が出来たという事を実感したものでした。

昭和56年春には金子昭、川崎博之、山本恒義、森田莊二郎先生が入局し、医局も賑やかになり、開院に向けてカルテを作ったり、高知医大が全国に先駆けて導入したコンピューターシステムやカルテなどの搬送システムのリハーサルなど開院の準備をしました。昭和56年10月19日待望の大学病院が開院し診療が開始されました。病棟は3階西病棟で脳外科、眼科、麻酔科、放射線科との混合病棟で第一外科は35床からスタートしました。

昭和57年大阪医大から荒木京二郎先生が講師として赴任され、また北川尚史先生が入局しました。8月には高知県医師会学会で高知医大の症例での発表を行い、9月からは第一内科との合同カンファレンスを開始され、手術症例も増えてきました。10月には東病棟が完成して引越し、45床となり手術の枠も週8単位となり大変多忙な毎日になりました。帰宅するのが夜11時、12時という生活でした。特に緒方教授が力を入れ、放射線科と共同で行っていた食道癌患者の術中照射は時間がかかり、朝8時半に手術室に入り、出てきた時は翌日になっていたということもありました。今は懐かしい思い出です。

当時は臓器別のグループ分けはなく、皆で何でもやろうという体制でした。

昭和58年には公文正光、上岡教人、中井邦博先生が入局しました。附属動物実験施設が完成し私も犬を使って実験をしたことでした。5月清藤助教授が退職し岡山へ帰られ、荒木先生が助教授に就任されました。

昭和59年高知医大第1期生が卒業し、国家試験合格率100%という輝かしい成績を収め全国から脚光を浴びました。その優秀な1期生から阿部哲朗、久礼三子雄、小林道也先生が入局し、日大から橋本祥格、北海道大学から山下邦康先生が入局しました。この年大学院棟が完成し大学院医学研究科が設置され、医局員が増え手狭になった医局を大学院棟に移転しました。

昭和60年第2期生、計田一法、杉藤正典、杉本健樹、近藤雄二、伊与木増喜、柴岡義人、森村豊先生の何と7名が入局し、高知医大の中でも最も活気のある医局だったように思います。私はその年に大学を退職し須崎市に「須崎くろしお病院」を開業しましたので、山下先生に医局長を交代しました。

その後も医局員は順調に増え平成8年には緒方教授が退官し、荒木京二郎教授が2代目教授に就任され、平成18年花崎和弘教授が3代目教授として信州大学からおいでしてくれました。この間の10年の間に教室で働く先生が漸減し、現在マンパワー不足の状態になっていますが、研究マインドを持った優れた外科医(academic surgeon)を育成するという花崎教授の大目標の達成に向け、現教室員の先生方は少数精鋭で頑張ってくれています。

外科手術も様変わりし鏡視下手術が当たり前になり、また拡大手術と縮小手術がそれぞれの長所を伸ばして展開されています。花崎教授は肝、胆、膵領域が専門で卓越した手術手技と人工膵臓を使った術中術後管理で素晴らしい手術成績を挙げ、わずか2年足らずでこの領域の手術症例が大幅に増えています。また小林先生は医療学講座医療管理学分野の教授になられ、以前から手が

けていました胃癌、大腸癌など消化管の内視鏡手術を確立し、着実に症例数を増やしています。杉本准教授は乳腺、甲状腺外科で高知県をリードする存在になっています。

このように臓器別の専門医を育成するシステムを確立し、それぞれの分野の質の向上が計られており頼もしい限りです。

今後、高知大学外科学講座外科 1 が花崎教授の下で診療、研究、教育のそれぞれの分野で意欲的に活動され、全国区の外科医局となりますことを祈っています。

私の医局長時代

高知県立幡多けんみん病院 院長
第2代医局長 山下 邦 康

私は昭和59年10月に、18年半を過ごした北海道から高知に帰り、田村精平先生を通じて緒方教授よりお許しをいただき第1外科に入局いたしました。出勤した最初の日に当時入局1年目の小林道也先生が病院食堂に案内してくれたのを覚えています。

ところが、翌年、田村医局長が開業し退局される事になり田村と同期で一番年長であったためと思いますが、緒方教授から医局長をやるように命ぜられました。入局からそれ程経ってなく、まだよそ者のお客さん気分も抜けてない時期で(田村先生に雇ってもらおうかなとも内心考えていましたので)驚きましたがとりあえずやってみる事になりました。

医局長になって一番考えたのは、新設医大ではどこでもそうだったと思いますが、しっかりした関連病院がなく、入局後の臨床教育の面や、将来の医局員の就職先が心配であり、なんとしても県立病院などの公立病院を関連病院としなければならないという事でした。自分の経験からも、大学だけではなく外の幾つかの病院で武者修行する事は、将来、臨床で生きていきたいと思っている若い外科医にとっては有意義な事だと思っていましたので、たくさん手術経験を積める関連病院の必要性を感じていました。

しかしながら大病院はそう簡単ではありませんし、岡山、徳島の老舗に対抗するのは大変でしたが、中央以外の県立病院なら可能性が有ると思っていたところ、昭和62年末頃、西南、宿毛の2病院を統合するという話が新聞にも出て、ちょうど5期生の入局勧誘をしていた頃で、君たちのためにこの新しい病院を俺たち高知医大がやるようにしてやると、大法螺を吹いた事を覚えています。またその頃県立安芸病院の宇都宮院長から話があり、金子、杉藤の2人を送り込む事が出来たのですが、そうこうしているうちに安芸の医長が辞められ、結局宇都宮院長の策に落ち、自分が行かざるを得なくなり、困っていた緒方教授に私が行きますと言うと、「すまんー」と何度も言われてかえって恐縮しました。

医局長は平成元年5月に安芸に出た時で終わりましたが、翌平成2年5月宿毛病院院長となり近藤、中村を連れて宿毛に行き、平成8年4月西南病院長兼務となり、平成11年幡多けんみん病院開院の時にはほぼ全ての診療科が高知医大からの派遣となり、以前の大法螺が本当になってしまいました。私の医局長時代はこの時やっと終わった気がします。

ただ、今になってみるとこれで良かったのかどうかは分かりません。金子、近藤、計田、中村をはじめ上岡、尾崎など一緒に頑張ってくれた医局の仲間達にはかえって無理をさせてしまってすまなかったかなと思っています。

PHOTO ALBUM



昭和53年 5月27日 緒方教授御就任祝賀会 於荒手茶寮

1978年 緒方教授就任祝賀会



1979年 大学西門。右から緒方教授、尾崎さん、今枝さん、高橋さん、矢野さん。左奥は建築中の病棟



1980年 第1回 医局旅行(南宇和海国立公園)



1981年 医局旅行(鳴門)



1982年 医局旅行(足摺岬)



1983年 医局旅行(井ノ岬温泉)



1983年 学生とのコンパ



1985年 医局旅行(小豆島)



1985年 田村医局長送別会



1985年 忘年会





1986年 医局旅行(大洲)



1987年 岡島婦長送別会



1988年 開講10年



1988年 新入局員歓迎会。後列左より別府、氏原、中野、中村、秋森、谷崎



1988年 医局旅行(岡山)



1991年 開院10周年記念誌より



1988年 Malignants



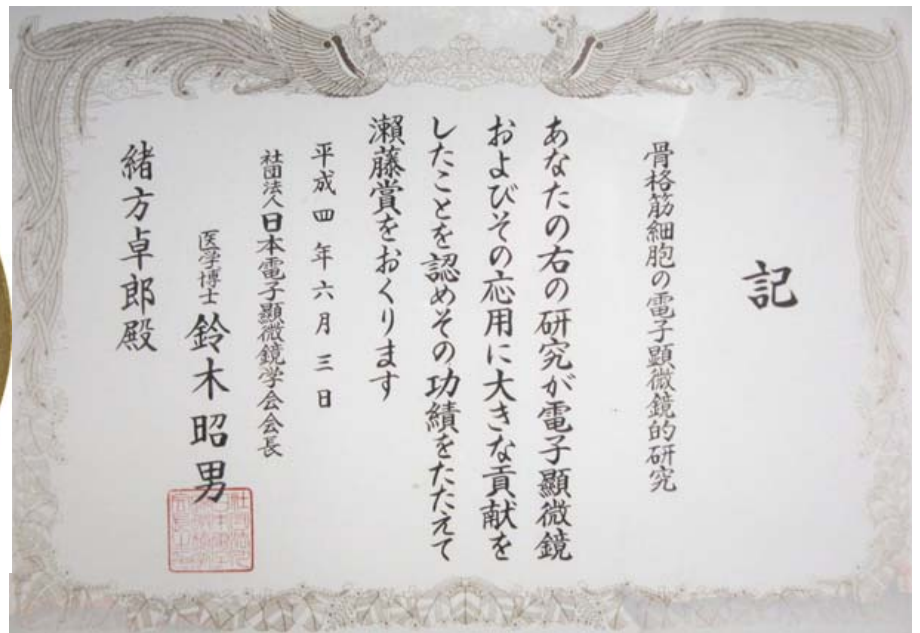
1991年 新入局員歓迎会。左2人目より安藤、並川、直木



1992年 新年会



1992年 第33回中国四国小児がん研究会



1992年 緒方教授 瀬藤賞 受賞



1992年 瀬藤賞 受賞祝賀会



1992年 第67回中国四国外科学会



1994年 医局旅行(福山)



1994年 第26回日本臨床電子顕微鏡学会



1994年
日本小児外科
学会中国四国
地方会



1995年 緒方教授
安澄記念賞 受賞



荒木教授時代



変革か 継続か

高知大学 名誉教授
荒木 京二郎

昭和 57 年 1 月末、夜明け前の高知港は肌寒く、緒形卓郎教授の直々のお迎えを頂いて、ご自宅でご馳走になった暖かく薫り高いお紅茶と朝食が身体に沁みわたりました。時の移りは早や 26 年、小生は一期生の臨床実習に合わせての赴任でしたので、開講からは 30 年になるのです。

30 周年記念を花崎和弘教授が実行されることを、嬉しく有り難く思います。開講 10 周年の時は準備に取り掛かりましたが、気運熟せず、せつかく貴重な原稿を頂いた 1 - 2 の方には申し訳なく、反省しきりです。20 周年の頃の前後数年間は諸事情が重複し、医局としての公の行事を疎かにしてしまったことを心から反省している次第です。

“風邪は頼んでも貰え”、こんな日本の格言、耳にしたことのある方は余程のお齡の方が...失礼。盆と正月しか休みの無い昔、しかもこの期間は祭りや飲めや歌えやで疲労困憊、身体を休める時がなかった人々にとり、少々だるいが適度に身体を休め、栄養をつけて大事にされる風邪は有難いものだったのかもしれない。

この正月明け、治ったと思った風邪がぶり返し、つばも飲めないほど疼く咽喉と全身の関節痛をなだめる様にソファの上でクッションをアチコチずらしながら、「冷えピタ」を貼り、ガーゼを詰めこんだ厚いマスクに埋まって、見るとはなしにテレビを見ていました。

その番組は武道を極めることに生涯を賭けておられる人との対談の様でした。この道を通して何か悟られたことが御座いますか？との問いに、“止めること、これが今思っていることです”。え！放棄するの？生涯を掛けた意味が無いじゃないの？一瞬私は弛んだまぶたを開いてそう思いました。“今のことを止めることで次への流れが生まれます”と説明を加えて下さいました。“一点で停滞するのではなく次に移ること”という意味なのだと思いました。そして勝手に「固執することは変革を妨げること」と理解しました。

しかし、一方に“継続は力なり”という私が以前から大切にしている言葉もあります。物事を成し遂げるための必要不可欠の真理です。事を成すための最も要を得た言葉と今も信じています。そして、これは「固執すること」です。かの武人の言葉とは全く逆ではありませんか。

熱で呆けた頭で考える。一つの物事でも相反する矛盾した性質を持つのだろうか？と。紙の表・裏？ 全面が表で全面が裏とも言える水晶の玉？ メビウスの輪？ クラインの壺？ そんなものと同じに考えて良いのかな シャボン玉 ウン！これは面白い、シャボン玉を作る分子は激しく流動し、しかも球の形を保っている。ある！ ある！ 矛盾するよう見える性質を合わせ持っているものは幾つもあるではないか。矛盾していると思うのは、凡人が自分の目線からしかものを見ないからのなだろうか？と思いました。

しかし、あまり頭を悩ますこともありませんでした。“行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず”。千年も前、鴨長明はすでに分かりやすく論してくれているではありませんか。

同じもの、同じ物事・事柄でも、見方・解釈の仕方、観点・視点、マクロ・ミクロの程度などで、様々な見え方をするものと理解して良いのかなと思った次第です。

それでは、今の医療界、福祉の世界にこのような矛盾はないだろうかと考えました。ある、と言うところではありません。同じ事柄でも視点の違いで、対立し、批判し合っています。そして事柄の余りの多さと複雑さに、その矛盾の複雑さと深さに、それらをどう関連づけて、どう解決に向けて対応するか、今はほとんど全くお手上げの状態です。どこからどの様な糸口を見いだせば良いのか？ どうすれば解決に向かうのか？

一つの見方として大学の使命の観点から考えてみたいと思います。

昔から、「教育」、「研究」、「診療」が医学部の責務であると言われ、鼎の三つの足であって、どの一つが欠けても鼎は傾き倒れると言われて来ました。これは間違いのないことであり、今もその通りだと思います。人の命に最も近い事柄を扱う医学は膨大な知識の取得と豊かな人間性を育む

「教育」が要求されると同時に、医学も医療も常に完全なものではあり得ず、たゆまぬ「研究」によって解決すべきことが常に山積している。また、知識が人を治療する訳ではなく、患者さんに直接接する医療者の「診療」の行為によって、医療が成り立つ訳です。時代が進むにつれて「社会貢献」も大学の責務の一つと考えられるようになってきました。四本足になったわけです。そしてこれらの責務は互いに有機的に関連し合っており、それぞれに独立して存在することは出来ないことは医療をご存知の皆さんに説明はいらないでしょう。

現状はどうでしょうか。先人のご努力と進歩によって、知識量は際限なく膨れ上がり「教育」はマニュアルの詰め込みのような状況に近くならざるを得なくなりました。「研究」は技術先行になり、生物学的研究は医学の手を離れて、細胞や分子・遺伝子を扱い易い、水産学、農学を修めた人が従事することが多くなり、新技術を人や生命に対してどう応用するかは後で考えるようになりました。また「診療」は大きな総合病院がたくさんあるから、そこで経験すればよい。「社会貢献」は特許や企業との連携などの経済的方向に大きくシフトしています。

この様に、医療者を育てるために分離不可能な大学の使命の一つ一つが相互の大切な関連性をほとんど喪失している状況と思われまます。この状況のもとで医療全体の進む方向や、福祉を含めた国民の健康な生活を営む権利(憲法 25 条)を維持するための社会組織を作るのは難しくなってしまった、と感じています。

むかし計画経済を取って来た国々が思い浮かびます。歯車を幾つ作るのが私の仕事、麦を何トン作るのが私の仕事、他の人が何をしているのか知らない...、それは私の責任では無い。自分も含めて、それらがどの様に皆の生活の上で役割を果たしているのか分からない。

大学医学部の使命は今それと似た状況になって来ているのでは無いでしょうか？本来有機的に繋がっていなければならない大学医学部の本来の使命が分断されたために、医療者養成、医療制度、福祉制度もそれぞれがあたかも独立したものであるかのような構造になり、噛み合わず、軋み、崩壊して行くように思えます。これらの問題点はあまりにも多く、あまりにも複雑であるため、簡潔な解決法があるようには思えませんが、最も大きな問題点は医師会、大学医学部、医学会、国民、政府、所轄官公庁など、医療・福祉に関わる人々や機関が自己の観点からだけの主張で行動し、関連の人々、関連組織との繋がりのところで摩擦をおこし、全体への視点が狭いことです。何を止めるべきか、どの流れに持って行くべきかを、全国民レベルで考えなければ、せっかく高いレベルを維持して来た日本の医療・福祉は個々の努力の甲斐無く、崩壊への道を辿ることでしょう。計画経済を取った諸国でさえ今は大きく考えを変えて来ているのです。

医局長時代を振り返って

いの町立国民健康保険仁淀病院 院長
第3代医局長 松浦 喜美夫

私と高知医科大学第一外科の関係は、母校の弘前大学医学部を卒業後、同大学の第2外科に入局して6年が経過した昭和55年の夏で、初代教授の緒方卓郎教授に高知医科大学第一外科の教授室でお会いしたときが最初でした。その時に高知に帰ってくることを決めて、実際に高知に帰ってきたのは、前任地の秋田市民病院を辞職した後で、昭和55年の10月1日でした。この時の医局長は初代の田村精平先生でした。

この時には高知医科大学には附属病院が無く、民間病院に勤務しましたが、その後翌年の56年4月に医学部の助手となり、免疫学教室にも籍を置きマウスのキラーT-cellの実験に取り組んでいました。昭和56年10月19日に附属病院が開院し、緒方教授以下数名の医局員で高知医科大学第一外科の診療が開始され、病院での勤務が始まりました。その時は3階西病棟でしたが、翌年東病棟が出来あがり現在の3階東病棟に移転しました。第1外科の診療科目は消化器外科を中心に、乳腺内分泌外科、小児外科を担当し、小生は弘前時代に小児外科を研修していたので、一般外科の他に小児外科も担当となりました。その後小児外科の研修目的で昭和58年に6ヶ月間、静岡県立こども病院の外科に研修に出させていただきます。小児外科での思い出は、最も大変な新生児疾患の一つである食道閉鎖症の症例で、開院2年目の昭和57年のクリスマスの夜に緒方教授と緊急で食道吻合の根治手術を行い、正月も病院で寝泊まりしたのを憶えています。その後も小児科や産婦人科の先生方とNICUなどで一緒に、新生児や小児固形腫瘍などの外科的疾患の治療に当たらせていただき、勉強させていただきました。現在は久留米大学から来られた緒方宏美先生が継続して小児外科の診療にあたり頑張らせていただいております。

医局長は田村先生が大学を離れ須崎市に病院を開業されて、昭和60年7月1日に北海道大学医学部から帰ってこられた山下邦康先生に交代しました。その後山下先生は県立宿毛病院に院長として転出され、平成元年4月1日より小生が医局長となりました。その後、15年間医局長として医局の面倒を見させていただき、平成15年4月1日小林道也先生に交代になりました。

医局長の仕事は教授の補佐や、医局の運営、行事などの企画で、その他に関連病院との連絡、病院の当直者の割り振り等で、医局の雑用も多くあり、池田さんをはじめ秘書の方にはずいぶんお世話になり、ご無理を聞いていただき感謝しております。医局の行事は毎年の医局旅行、スキー旅行、忘年会、お花見、新入医局員歓迎会など宴会などの親睦会が主でした。医局・スキー旅行は医局員同士の親睦会ですが、医局旅行は1泊2日の日程で海や山に出かけました。初日の宴会の後、2日目はゴルフの盛んな頃には海水浴や登山組とゴルフ組に分かれ、二日酔いの脱水でのプレーはきつく、リスクの高いゴルフでした。行き先は最初、四国内でしたが、次第に行くところがなくなり、また昭和63年には本四連絡橋ができましたので、瀬戸大橋を渡って岡山へ出かけ、その後も中国・近畿地方にも出かけるようになりました。楽しいスキー旅行は家族連れで行くようになり、家族の親睦も兼ねており、行き先も愛媛県的美川スキー場から、高速道の開通もあり、平成4年からは鳥取の大山スキー場へ出かけるようになりましたが、しかし年によっては雨が降り滑れない時もありましたが楽しい時間を過ごしました。広いゲレンデで家族も交えて、普段忙しく疎かになりがちな家族サービスも兼ねて楽しい旅行でした。忘年会、新入医局員の歓迎会は関連病院の先生や開業された先生など多くの方が一同に集まり、普段は会うことのない同門会の先生や先輩の先生との親睦が主となっていました。一方で医局行事は診療で忙しくストレスの溜まった医局員のガス抜きの役割も果たしていました。

最後に、今後も、色々な医局の行事を通じ、医局員だけでなく家族や先輩や関連病院の先生方など多くの方々との交流が図れる場として、また同時に皆さんに、医局を広く知っていただく機会となればと願っています。

開講 30 周年誌によせて

高知大学医学部 医療学講座医療管理学分野 教授
第 4 代医局長 小林 道也

高知大学医学部外科学講座外科 1 が開講 30 周年を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。

私は昭和 53 年に高知医科大学に入学いたしました。その年に緒方卓郎先生が初代教授に就任されたわけです。私たちは入学試験を当時の高知大学朝倉キャンパスで受験しています。発表も朝倉キャンパスに見に行き、高知医科大学開設準備室(?)に 3 代目の学長になられた俵寿太郎先生をお尋ねしたことを鮮明に記憶しております。発表の後、岡豊の高知医科大学を初めて見に行きました。教養棟、研究棟、実習棟が完成していましたが建物の周辺は泥沼という状態で、板の上を歩いていった覚えがあります。入学式は 4 月の半ばでしたがさすがにそのときにはきれいに舗装されていました。そのような状況から緒方先生をはじめとして先輩の先生方が教室を作り上げていらっしゃることに敬意を表します。

学生時代には、緒方卓郎先生、清藤敬先生、荒木京二郎先生をはじめとして現在は教室の基幹病院の院長をお勤めの田村精平先生、臼井隆先生、高田早苗先生に講義、ご指導を賜りました。その頃は、松浦喜美夫先生は免疫学教室の先生と思っておりました。また、臨床実習のころ、公文正光先生が国立がんセンター、国立松戸病院(現・国立がんセンター東病院)から帰っていらっしやっただのを記憶しております。その後、私は昭和 59 年に卒業し、入局いたしました。入局時のことは昨年(2017)の年報に詳しく書かせていただきました。

その当時は田村精平先生が医局長、臼井隆先生が病棟医長、公文正光先生が外来医長をされていました。さらに入局した年には山下邦康先生が北海道から地元の高知に帰っていらっしやいました。初日に病院食堂で昼食をご一緒しながら、いろいろとお話をお聞きしたのが昨日の様に思い出されます。田村先生が私の入局 2 年目には須崎くるしお病院を開設され、続いて臼井先生、公文先生、川村(明廣)先生が次々と大学を離れてそれぞれ田野、野市、窪川で開業されていきました。また、平成元年には山下邦康先生も県立安芸病院に移られ、昨年(2017)の年報にも書きましたがその際にはじめて病棟勤務をしている医師が全部で 6 名という事態になってしまいました。まさに現在の教室の中核の関連病院を主宰されている先生方が私の目の前をダイナミックに通り過ぎていかれた時代でした。

現在、医師不足、特に外科医不足が問題となっております。しかし私たちはこのような数々の“危機”を乗り越えて今日までがんばってきました。私は入局と同時に大学院に入学いたしました。2 年半を大学で川崎博之先生に、1 年間は厚生年金高知リハビリテーション病院で西山瑩先生と井関恒先生にお世話になりました。卒業 3 年目の夏から学位のための実験を開始し、その年の年末にはハワイ大学医学部病理学教室、Kuakini 病院病理部の林卓司先生の下に留学させていただきました。現在の私の医師としての考え方、また国際交流の基礎はここにあります。4 年目の終わりに帰国、無事学位を頂戴いたしました。5 年目の 4 月、つまり臨床経験 2 年半の時点で病棟に戻って一人グループとなりました。今思えばよくやったと思いますが、1 ヶ月後、新入医局員が入り、中村生也先生が私のグループに入ってくれました。しかしそのような状況ですので検査、プレゼンテーション、手術記録、術後管理、標本整理、サマリー、カルテ整理など手術の術者以外ほぼすべてをこなさなければならない状態が続きました。さらにその一年後に山下邦康先生が安芸病院へ移られたわけです。そのおかげと言っては何ですが、内視鏡(GIF, CF, ERCP, EIS)、血管造影、IVR などたくさん経験させていただきました。今、フレキシブル内視鏡、あるいは内視鏡外科の道に進めたのもこの時期があつたのころだと思っております。現在、大学におりますと当時に比べて診断・検査技術の低下を痛感いたします。外科 1 の若い医局員がお世話になったときには関連病院の先生方にはぜひこの点をご指導いただければと思っております。

開講 10 周年記念祝賀会は一宮にあった高知花壇で行われました。最初の 20 年はいろいろ議論しながら皆が楽しく仕事をしていったような気がします。20 周年記念の際には祝賀会その他はなぜか開催されませんでした。私は田村先生、山下先生、松浦先生の後、第 4 代の医局長をおおせつかりました。前教授の荒木京二郎名誉教授の時代です。この頃は大学の研究費、運営費などが削減され、また現在の卒後臨床研修の必修化と、それに先立った高知医大方式の 2 年間の臨床研修

が始まりました。さらに外科離れか？入局する先生が少なくなった上に、離局する先生の数が増え上回っていました。その中で人事をやり繰りしていったわけです。しかし、マンパワーの不足では空回りになることも多く、人事面では底をついた感があり、“袖を振っても何も出ず”、関連病院の先生方にはご迷惑をおかけしたことと思います。教室の結束が多少崩れかけたような気がして今思っても残念でなりません。

花崎教授から荒木先生のエピソードをご紹介するようにとのことです。何をご紹介してよいか迷うところです。約 20 年の間お付き合いさせていただきましたので、多くの思い出があります。私が入局した初日に荒木先生と当直をする（羽目？）になりました。慣れない初日の病棟勤務でしたので、夜遅くなり、眠くて仕方がなかったのですが、“結紮の練習をしよう！”とおっしゃられ当直室のベッドの上で糸結びをした思い出があります。幸いに夜中はあまり呼ばれることもなく朝を迎えましたが、今度は朝 6 時頃起こされ、“さあ ICU の回診に行こう！”とおっしゃられました。これは大変だと思ったことですが幸いにもその日以降、一緒に当直をすることはありませんでした。医師の姿勢を初日から教え込まれたわけです。当時の荒木先生はとにかく“怖い先生”で有名でしたが、私の医局長時代はかなりマイルドになられ、多少それに甘えさせていただきました。荒木先生の“凝り性”も有名です。主催する学会のプログラムの中の地図や抄録集などもご自分で作られました。本来は私たちがすべきことであつたのですがおそらく、不出来な者にはまかせきれないと思われていたのだと思います。

懐かしい思い出のたくさんある“第一外科教室”でした。

今もまだ人事面では大変な時期ですが、花崎先生の下、教室が更なる発展を遂げている途中で、近いうちに将来おそらく同門の先生方に喜んでいただける状態になると信じております。

PHOTO ALBUM



1996年 荒木教授 就任



1996年 忘年会



1998年 開講20年



1998年 医局旅行(神戸)



2001年 医局旅行(祖谷)



1999年 日本消化器病学会四国支部 第15回市民公開講座



1999年 第71回日本消化器病学会四国支部例会



2001年 第3回教育講演会



2002年 第18回市民公開講座

日本消化器病学会四国支部



2002年 第30回中国四国甲状腺外科研究会





2003年 四国臨床栄養研究会



2003年 新入局員歓迎会



2003年 松浦医局長送別会



2004年 医局旅行(琴平)



2005年 第80回中国四国外科学会



2005年 医局旅行(姫路)



2006年 荒木教授 退官

現在

Academic Surgeon になろう！

花 崎 和 弘

はじめに

お蔭様で開講 30 周年という節目の時期を迎えることができました。教室員一同慶賀に絶えませんが、これも一重に初代緒方卓郎教授、2 代目荒木京二郎教授を筆頭にお二人の教授の基で力を発揮し、教室を支えてこられた緒先輩方のご努力の賜物と教室を代表して厚く御礼申し上げます。

私にはお二人の教授が築き上げて来られたこれまでの輝かしい伝統と業績を引き継ぎ、発展させていかなければならない大切な使命と重責が課せられています。身の引き締まる思いでございますが、けして臆することなく満身に気力をみなぎらせて今後とも教室運営および改革に取り組む所存です。もとより浅学菲才の身ではございますが、今後とも皆様からのご指導・ご鞭撻を賜ります様何卒宜しくお願い申し上げます。

1. 外科医不足との戦い

経済学者の宇沢弘文氏は“医療と教育に従事する人の質と暮らしぶりは、その国の文化的な水準を象徴している”と提唱しています(Nikkei Medical 12:264-265,2006)。医療と教育に従事しているわれわれ医学部教官の暮らしぶりが豊かと言えないのはわれわれの質が悪いからでしょうか？それとも日本の文化的水準が低いからでしょうか？倉本 秋病院長は“(欧米に比べて3分の1から5分の1の教員数で)診療、臨床、研究、地域貢献、外部資金導入に努力している国立大学医師たちの給与として、教授になっても手取り40万円はあんまりです”と述べ、日本の医療を支えるためには給料体系の改定が必要だと提言されています(高知市医誌 12(1):226-238,2007)。

私にとって大学人の最大の魅力は“最先端医療の研究およびその実践と若い外科医師の育成”です。つまり“大変やりがいのある質の高い仕事に挑戦できる”という点です。しかし、平成16年から導入された新臨床研修医制度は、キャリアアップを求めて関東や関西の有力大学や有名ブランド病院へ研修医が集中するという現象を生み出しました。現行の制度がこのまま継続して高知大学のような地方大学に残る若い医師が減少し続け、地方大学における最先端医療と医師教育が破綻を来した場合は、地方大学医学部および附属病院はまさに存続の危機を迎えてしまいます。

外科医療において早急の問題は外科医希望者の減少です。平成19年日本外科学会の外科医を対象とした調査において外科医希望者減少の理由に挙げられたベスト3は 労働時間が長い、賃金が少ない、医療事故や訴訟のリスクが高いでした。すなわち“ハイリスク・ローリターン”を理由に外科医を敬遠して、外科医不足が加速されている可能性が高いという結果でした。大木隆生教授(アルバート・アインシュタイン医科大学外科)は“マスコミや国民が求める「安くて、安全で、質の高い医療」など、世界には存在しない。日本が今後、質と安全性がより高い外科医療を求めるといふのであれば、相応の出費を覚悟しなければならない。「ローリスク・ローリターン」というギリギリのバランスで成り立ってきた日本の外科医の生活も士気も、「ハイリスク・ローリターン」では崩壊するだろう”と米国から警鐘を鳴らしました(朝日新聞「私の視点」2006)。

こうした外科医不足の風潮を少しでも是正し、外科医療の魅力をアピールする目的で、高知大学附属病院は平成19年1月27日・28日に四国では初めての中学生や高校生を対象とした「外科手術体験セミナー」を開催しました。2日間で約80名の参加者があり大盛況でした。本企画がこれからも継続され、参加者の中から未来の外科医が一人でも多く誕生し、将来高知県の外科医療を支えてくれることを切望しています。

大学病院における医師不足が進む中で大学の教室にマンパワーを補充するために関連病院から医局員を引き揚げている外科教室も少なくありません。しかし、当科はこれまでそうしたことは一切しませんでした。また夜間当直のパートを断る教室がほとんどの中で、当科は可能な限りそれを引き受けて高知県の夜間救急医療に貢献してきています。そしてギリギリの戦力で奮闘している教室員を守るために外科医の労働環境の整備と報酬の改善を同時に進めると共に、新しい外科医師確保に向けて様々な取り組みを展開しています。

高知県においても進行している外科医不足の問題に対する当科の具体的な取り組みとして、以下の3点を関連病院の理事長、病院長、事務長などの病院幹部の皆様にお願ひし続けています。新たな外科医師を確保し、高知県での外科医療崩壊を防ぐためには大学の外科学講座のみが奮闘しているだけでは片手落ちで、研修先に魅力的な関連病院があることも必須だからです。

- 1) 教室から派遣されているローテーターの先生方にできるだけ多くの手術を執刀する機会を与えてあげてください
- 2) 昇給を含めて外科医の処遇改善を行ってあげてください
- 3) 若い先生方が将来の資格取得に困らないように外科指導スタッフには学会専門医（特に日本消化器外科学会）および指導医（特に日本外科学会）資格を早急に取得させてください

「医療崩壊：立ち去り型サボタージュとは何か」や「医療の限界」の著者である小松秀樹医師は“外科医は勇気あるペシミスト”であるべきだと提言しています。すなわち外科医は常にあらゆる悲観的な状況を想定しながらも、勇気を持って必要な手術を実施しなければいけません。“勇気あるペシミスト”の外科医にこそ素晴らしい未来が到来して欲しいものです。

外科医不足の問題に日々悩まされながら、若い外科医のロールモデルになろうと懸命に奮闘しています。これまで自己犠牲的かつ献身的な寄与によって高知県の外科医療を支えてきていただきました数多くの関係者の皆様の労苦を無に帰さないように、新たな外科医の確保および育成に努め、高知県の外科医不足解消に向けた戦いをこれからも続けていきます。今後とも同門会および関連施設の皆様からの力強いご支援を宜しくお願ひ申し上げます。

2. 教室の目標

教室の大目標は“**優れた外科医 (Academic Surgeon) の育成**”です。この大目標を達成するための具体的な3つの目標を以下に示します。

- 1) 医学教育の充実：母校愛を培う医学教育を目指す
- 2) 良好な手術成績の達成：良好な手術成績は良好な人間関係から生まれる
- 3) 高知発の優れた研究を世界へ発信：すべての研究は英語論文で完結

はじめに医学教育の充実ですが、全国的に進行している外科医療崩壊や外科離れに歯止めをかけるためにも、新たな入局者を確保することが教室を維持し、高知県の地域医療を死守する生命線となります。そのために学生に人気のある教室および研修医が夢を持てる教室作りを目指して様々な企画を展開中です。学生講義は手術ビデオを使用し、国家試験対策のための小テストやvisual lectureを駆使しています。また外科学に少しでも興味を持っていただくために学生や初期研修医にもできるだけ数多くの手術に参加する機会を設けています。更に普段から学生との交流も時間の許す限り行っています。他県出身の多くの学生たちが医師免許証を取得するためだけに高知大学を活用するのではなく、大学卒業後も高知に残って母校のために貢献していただけるような母校愛を培う医学教育を目指しています。

2番目の良好な手術成績の達成ですが、ほぼ及第点に届いてきています。本年度も杉本（乳腺内分泌・小児外科）、秋森（食道）、並川（胃）、岡本（大腸）、岡林（肝・胆・膵）の各チーフが自転車操業の中、本当に良く頑張ってくれました。その結果、手術件数も順調に増加し、病院収益にも大いに貢献しております。各グループともチームワークが良く、手術手技と周術期管理が安定しているため、術後の合併症が少ないのが何よりです。特に就任当初より提唱してきた若い時期から執刀医として手術を経験させる“パーツ教育法”は各チーフの努力の結果、次第に定着してきました。また小林教授のご努力で腹腔鏡下手術の適応は年々拡大してきています。肝・胆・膵癌に対する拡大手術および乳癌に対する縮小手術は他施設で使用されていない様な最新の手術器具や装置を用いて実施されています。

当科では本人の希望があれば国内外の一流施設での武者修行を大いに薦めております。平成19年度は並川講師が国立がんセンター（佐野 武先生）で胃癌手術の研修を2週間行い、北川先生が順天堂大学（鶴丸昌彦教授）に食道癌手術の見学に行ってきました。また昨年度に引き続き小林教授率いる腹腔鏡外科チームが技術向上のために上海でラボ研修を行いました。その国を代表する一流の外科医たちとの交流によって実力は間違いなく伸びます。“井の中の蛙大海を知らず”ではダメです。全員が“優れた外科医になる”を合言葉に常に向上心を持ってブラッシュアップして行って欲しいものです。

次は反省です。併存疾患を伴う難易度の高い消化器外科患者の周術期管理においてきわめて稀ですが、不十分な点があります。当教室の明るい雰囲気は大事な宝ですが、周術期管理の際はあまり楽天的に物事を考えないことが肝要です。休日返上で頑張っても、術後合併症はちょっとした油断ですぐに発生します。“石橋を叩いても渡らない”くらい用心深い周術期管理を心がけ、手術成績を向上させていきましょう。

3 番目のすべての研究は英語論文で完結ですが、拙著“英語論文の書き方”という小冊子を教室員全員に配布し、英語で論文を書く意義とトレーニングのコツを伝授しています。これに関しては教室員の自覚が目覚しく、着実に成果が上がりつつあります。臨床の教室ですから、臨床研究の論文をたくさん書きましょう。5年後、10年後の業績集が今から楽しみです。

3. 研究の大切さや面白さ

初年度は関連病院勤務中の大学院生に学位取得を目指した研究テーマが与えられておらず、研究が宙ぶらりんだ点を指導者として大いに反省しています。平成19年度からはそうした先生方にきちんと研究テーマを与えて学位論文が完成するように指導しています。外勤中の大学院生は関連病院における日常診療が多忙でなかなか研究がはかどらないのが悩みの種です。現在学位のテーマとして人工臓器研究と膵癌・肝癌に対する分子生物学的研究だけでなく、緒方卓郎名誉教授に指導をお願いして“brush cell”の研究も進行中です。いずれの研究も新知見が続々と始めてきており、楽しい研究に発展しそうな予感がしています。一流の国際誌に学位論文が掲載されるように大学院入学のメリットを生かしたシステム作りを急ぐ必要があります。

なぜ外科医が研究をするのでしょうか？私自身は臨床上発生した疑問点を研究で解決し、再び臨床の場へフィードバックして、外科治療成績向上に役立てるためだと考えています。またたとえretrospectiveな研究でも自分たちが行った手術成績を絶えず論文化して反省を加えることは、治療成績向上を目指した次なる有効な治療戦略を構築するためにも必要不可欠です。手術成績をまとめ上げることは大変な労力が強いられます。しかし、古今東西一流の外科施設は手術成績をきちんと論文化して公表しています。当科も上記の点を踏まえて研究を続けていく方針です。

研究のテーマは外科医ですので手術手技や周術期管理上から生じた疑問点を解明し、外科学の発展に少しでも貢献できるものが理想です。研究の面白さを理解している教室員はまだまだ少ないのですが、全国学会の主題発表や外国雑誌に論文が受理されるようになると俄然やる気も出てきます。大学医学部は“医学発展のために貢献しなければならない研究機関”です。最近は臨床能力ばかりに注目が集まりがちですが、研究による新しいエビデンスの創出がなかったら臨床医学の大きな発展は望めません。また「論文として残せる研究のないところに秀れた臨床医は育たない」という名言もあります。研究の面白さを一人でも多くの教室員にわかっていただき、高知から世界に向けてたくさんのエビデンスを発信していきたいものです。

4. 優れた外科医の育成法

腹部外科手術の最初の成功例は1809年ケンタッキーの片田舎で行われた重さ6kg超の卵巣腫瘍摘出術でした。執刀医の名前はエフライム・マクドゥウェル。全身麻酔もない頃にマクドゥウェルは自宅の一室で外科学の歴史に燦然と輝く世紀の大手術を行い、成功しました（小川道雄訳：外科医の世紀・近代医学のあけぼの）。

外科医に求められている一番大事な要素はマクドゥウェル先生のような“目の前の患者さんを何とか救おうとする熱意”ではないでしょうか。そのために外科医が身につけなければならないものを3つ挙げます。

- ✓ Humanity：高潔な人柄
- ✓ Art：最高の医療技術
- ✓ Science：最新の医学知識

以上の3つを身につけるための具体的なプランを教室はこれからも提案し続けていきます。

- 1) パーツ教育法による手術手技の向上：若い時期から執刀医として教育する
- 2) 英語論文の推奨：研究を世界へ発信する
- 3) 専門医・指導医資格の取得の推奨：取得する過程で学術的業績(論文)と外科手術の業績(手術数)の両方が上がる。しかも資格を有した医師が働いている関連病院にとっても学会の認定施設となり、高い評価が得られる。

各々について順番に概説します。

1) “パーツ教育法”は当科で実践している手術修得方法です(図参照)。図に示した如く、一つの手術を予めいくつかのパーツ(図ではAからDまで)に分別しておきます。最初に指導医の手術の助手として入り、すべてのパーツの手術を数回経験します。次に執刀医として簡単なパーツ(図ではA)から始めて順序だてて難しいパーツへと移行し、最終的には手術全部のパーツを過不足なくマスターし、一つの手術術式を修得していく方法です。当科では何回も復習ができるようにほとんどの手術はDVDビデオで保存してあります。

若い時期から術者としての経験を積ませることを目的とした明解で効率的な手術修得法です。この方法の最大の利点は若い時期から一手術症例の中に自分が執刀できる部分が必ずあるため“自覚 and/or やる気”を持って手術に臨める点と簡単なパーツから順番を追って基本的な手術手技や操作を反復することになるため無理なく難しいパーツへ移行できるという点です。一つのパーツは個人の修得度や手術の難易度にもよりますが、5例から10例位を目標に執刀していただいています。このようにシステマテックに指導教官が若い教室員に手術を教えることは教える側も勉強となるため、相乗効果が期待できます。また若い外科医がやる気を持って手術に臨めるため、手術場の雰囲気もいいものになってきています。ただし、指導者の的確な判断力と根気強い姿勢が問われます。

ちなみに平成18年度入局の3人はパーツ教育法によって後期研修開始1年間で肝切除は各人10例前後ずつ、胆管-空腸吻合を含めた消化管吻合などは数十例ずつ執刀し、いずれの症例もトラブルはなく安全に施行できました。

2) 英語論文に対するアレルギーが徐々に解消されてきています。後期研修医で既に10編近くの英語論文を書いている“つわもの”も出てきています。若い時期からのトレーニングが英語力アップには不可欠です。英語論文については毎年少しずつレベルアップしていく方針です。待望の手術症例のデータベースがようやく出来上がりました。このデータベースが“魔法のランプ”になって英語論文が次々と誕生することを切望しています。

(図)



3) 具体例を提示します。平成 18 年 9 月に駄場中 研先生(助教)に当科へ復帰していただきました。その際、私から彼に自分の考え方や教室運営の基本方針を語り、「駄場中先生にとって大学へ戻ってきたことが良かったと言えるようにしましょう」とつけ加えました。駄場中先生は私の期待に応えて一年以内に日本消化器外科学会専門医取得に必要な日本語論文を 3 編きっちり仕上げました。またその間に病理学教室(降幡教授)に出入りして学位の仕事に着手し、成果を上げつつあります。更に現在は複数の英語論文を執筆中です。これまでは病院への一番乗りは私でしたが、いつの頃からか私より早い時間帯に駄場中先生が病院に出勤するようになりました。夜も遅くまで顕微鏡を覗いています。もちろん日常診療や手術も積極的に取り組んでいるのは周知の事実です。

私は自分の教室運営のよき理解者を得たと大いに喜んでいますが。駄場中先生の実行は私の小言よりもはるかに大きな力を持ったメッセージになるからです。駄場中先生は大学へ復帰したメリットを最大限活用し、近い将来学位も専門医もそして目には見えない“もっと大切なもの”も取得していくことでしょう。

仕事ができる人かどうかの一番の判断材料は“スピード”です。命じられた仕事を早く仕上げる能力を重視しています。仕事の出来ない人の共通点はなぜ仕事ができないのかの“言い訳の多さ”です。日常診療が多忙な外科医に仕事のスピードを求めるのは酷かもしれませんが、そうした状況でやり遂げるからこそ逆に価値があるのではないのでしょうか。私にとって手術の次に優先順位の高い仕事は教室員の論文査読です。やりとりは複数回になる場合が多いのですが、できるだけ 1 週間以内に修正を加え、返却するように心がけています。論文は生き物、生ものです。遅くなればなるほど論文の価値である新鮮度は落ちます。教室員の論文査読は指導者の最も大切な仕事の一つと肝に銘じて取り組む所存です。

“Strike while the iron is hot: 鉄は熱いうちに打て”という格言のごとく、外科医が一人前になるためには若い時期(20 代から 30 代)にどれだけしっかりしたトレーニングを行うことができたかどうか、そして自分を生かしてくれる指導者に会うことができたかが大変重要な鍵となります。「花崎外科で教育された外科医はしっかりしている」と周囲から評価していただけの様な人材育成に取り組んでいく覚悟です。

5. おわりに

現時点で教室のスタッフはこれ以上頑張れないくらいのギリギリのラインで踏みとどまって頑張ってくれています。しかし、教室は今後も“優れた外科医(Academic Surgeon)の育成”という大目標に向かって成長し続けなければなりません。一つの仕事に対峙した際、受動的に Spectator するか? 能動的に Operator するか? あなたはどちらを選択しますか? われわれ外科教室は少なくとも仕事に関しては終始一貫して operator であり続けたいものです。

これまでの 30 年間の教室の遺産をしっかり引き継ぎながら、勇気を持って新しい歴史の第一歩を踏み出してはいかがでしょうか。

最近の医局の動向と乳腺・内分泌外科の現在と未来像

第5代医局長 杉本健樹

高知医科大学医学部第一外科学講座としてスタートした私どもの高知大学医学部外科学講座外科1もついに30周年を迎えることとなりました。長い医局の歴史や思い出については歴代の医局長を務められた諸先輩方がこの記念誌で詳しく書いていただけることと思います。私は医局長になりやっと1年を過ぎたばかりの新人医局長ですので、最近の医局の状況について少し報告したいと思います。平成18年4月に花崎和弘先生が教授に就任されて以来、手術症例数が飛躍的に増加し、臨床を中心に医局員全員が多忙を極めています。しかし、その忙しい中でも各種学会での主題発表の増加、外部資金の獲得、企業との共同研究の増加など学術面でも着実に成果を上げています。人的な面でも、全国的に外科医になる新卒者の減少が著しいなか、花崎教授の優れた若い外科医の育成という教室の方針が浸透するとともに、平成18年度入局の3人(辻井、前田、吉岡)を中心に若い先生方の活躍が初期研修医や学生に対する刺激となり、平成20年度に3人、21年度にも3人の入局がすでに内定しています。外科に限らず仕事がハードで責任の重い診療科の医師がどんどん減少して医療崩壊が叫ばれる現状で、あえて母校の外科に入局し頑張ろうと考えている若者たちですから、非常にモチベーションが高く優秀な人材がそろっています。今後、マンパワーが充足されれば、臨床・研究面で医局全体の活動がますます活発になると同時に、若い先生方には国内外の施設で研修するチャンスも増えるものと期待しています。

医局全体の活発な動きに呼応するように、私が担当する乳腺・内分泌外科でも平成17年に40であった乳癌手術が年間約10例ずつ増え19年は60例を超え1.5倍になりました。19年後半の新患数の伸びから勘案すると今後もさらなる増加が予想されます。学会活動では平成18年の日本臨床外科学会・乳癌検診学会でワークショップ、19年の日本乳癌学会でパネルディスカッション、日本乳癌検診学会でワークショップ、そして日本臨床外科学会では特別企画で講演する機会をいただきました。国際学会でも19年はAsia Breast Cancer Conference(ABCC)とGlobal Breast Cancer Conference(GBCC)で2題ずつの発表を行いました。両学会で将来の乳腺外科を志す研修医の船越先生にも発表していただきましたし、ABCCでは私がシンポジウムで発表する機会をいただきました。平成22年には日本乳癌学会中国四国地方会の主催も予定しています。

また、厚生労働省の平成18年度「マンモグラフィ遠隔診断支援モデル事業」で約1億円の予算を獲得し、県内5つの検診機関・病院を接続するネットワークを構築中です。その他の研究課題としてICG蛍光法によるセンチネルリンパ節生検の新カメラシステムの応用やマンモグラフィのソフトコピーを利用したCADの開発など臨床的な課題が現実化しつつありますし、駄場中先生が新しい前立腺関連抗原の乳癌での発現をみる基礎研究をおこなっています。

平成20年春からは乳腺・内分泌外科として3人体制(杉本、甫喜本、船越)になる予定で、21年の入局内定者のなかにも乳腺外科の志望者(井上)がいます。現在、オーバーワーク気味で十分に時間をとることのできない他領域・他職種との定期的なカンファレンスやチーム医療の実践(チーム内でのエビデンスの共有を第一に)、マンモグラフィ検診の受診率向上を中心とした啓蒙活動や患者会などの互助的活動の支援にも力を入れていきます。また、さらに人的なゆとりができれば若手を中心に国内施設での研修ができるようにしていきたいと思っています。

現在、医局全体の活発な動きの中で、乳腺・内分泌外科も上昇機運にあります。また、優秀な若手が育っていますし、モチベーションの高い新人が続々と入局してくれる予定です。今後も、ひとつひとつの課題を丁寧にクリアしながら、着実に歩を進めていき、どんどん新しい仕事にチャレンジしている消化器外科の先生方に負けぬよう、更なる発展を求めていきたいと思っています。

PHOTO ALBUM



2006年 花崎教授 就任



2006年 さくら道



2006年 ホームページ開設

教授就任記念礼



2006年 小林教授 就任



2006年 前田先生が 日本臨床外科
学会 Freshman Award を受賞



2006年 手術手技コンテスト

2006年 忘年会



30年間の業績

申し訳ありません。次のページへお進み下さい。

なお、平成19年の業績はホームページ内「教室の業績」をご覧ください。
URL http://www.kochi-ms.ac.jp/~fm_srgr1/gyouseki2007.pdf

学 位 取 得 者

申し訳ありません。次のページへお進み下さい。

関連病院のあゆみ

申し訳ありません。次のページへお進み下さい。

30年のあゆみ

- 昭和 53 年
4 月 1 日 高知医科大学第 1 外科教室開設
岡山大学第 1 外科教室 緒方卓郎講師が初代教授として就任(1978 年 4 月 1 日 ~ 1996 年 3 月 31 日)
清藤敬助教授就任、川村明廣が入局第 1 号となる
- 昭和 54 年
4 月 1 日 医局長 田村精平
4 月 研究室の備品配置等を行い、形だけは研究室として整う
- 昭和 55 年
新入局者は高知県立中央病院にて研修開始
- 昭和 56 年
10 月 19 日 医大病院診療開始。3W 病棟、第 1 外科、脳外科、眼科、麻酔科、放射線科の混合病棟で第 1 外科は 35 床からのスタートとなる
- 昭和 57 年
9 月 6 日 第 1 内科との合同カンファレンス開始
10 月 24 日 病棟 3E に引っ越し 45 床、手術も 8 単位 / week となる
- 昭和 58 年
5 月 31 日 清藤敬助教授退職
8 月 1 日 荒木京二郎講師が助教授就任
- 昭和 59 年
5 月 1 期生入局 阿部哲朗(大西病院院長) 小林道也(医療管理学分野教授)
久礼三子雄(くれクリニック院長) 日大より橋本祥恪(橋本胃腸科内科外科院長)
- 昭和 60 年
7 月 1 日 医局長 山下邦康
- 平成元年(昭和 64 年)
3 月 11 日 開講 10 周年記念式典(高知花壇)
4 月 1 日 医局長 松浦喜美夫
- 平成 4 年
6 月 3 日 緒方卓郎教授 日本電子顕微鏡学会より瀬藤賞を受賞
- 平成 6 年
5 月 第一外科同門会楷風会発足。以後毎年 5 月同門会、特別講演会開催
- 平成 7 年
10 月 18 日 緒方卓郎教授 日本臨床電子顕微鏡学会より安澄記念賞を受賞
- 平成 8 年
3 月 31 日 緒方卓郎教授定年退職

4月1日 荒木京二郎助教授が教授に就任（1996年4月1日～2006年3月31日）
10月1日 松浦喜美夫講師が助教授就任

平成15年
3月11日 第1外科・第2外科が統合され、附属病院では外科がひとつになる
4月1日 医局長 小林道也

平成16年
4月1日 小林道也講師が助教授就任

平成18年
3月31日 荒木京二郎教授定年退職
4月1日 長野県厚生連篠ノ井総合病院 花崎和弘外科医長が教授に就任
11月1日 小林道也助教授が高知大学医療学講座医療管理学分野の教授に就任
医局長 杉本健樹

平成19年
3月1日 杉本健樹講師が助教授就任
4月1日 杉本健樹助教授が准教授就任
8月1日 杉本健樹准教授が病院教授に昇進
8月1日 並川努講師が病院准教授に昇進
8月1日 岡林雄大助教が講師に昇進

2007年 医局ニュース



1月27日 外科手術体験セミナー開催



4月2日 さくら道



3月1日 杉本講師が助教授に昇進
4月1日 准教授
8月1日 病院教授に昇進



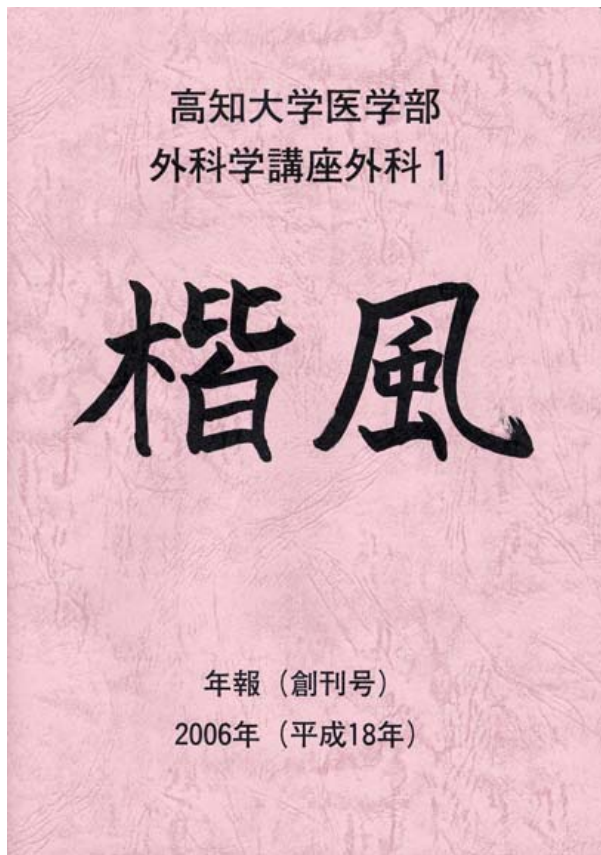
4月2日 緒方助教(小児外科) 赴任



8月1日 並川講師が病院准教授に昇進



8月1日 岡林助教が講師に昇進



4月19日 年報(創刊号)発行



11月5日 入局案内作成

医局員のこれまでの研修状況

吉岡 龍二 医員	平成 18年 7月 24日～7月 29日 癌研有明病院
前田 広道 医員(現 助教)	平成 18年 7月 31日～8月 4日 国立がんセンター中央病院
辻井 茂宏 医員	平成 18年 8月 7日～8月 11日 国立がんセンター中央病院
益川 賢 講師(現 病院准教授)	平成 19年 8月 6日～8月 17日 国立がんセンター中央病院、胃外科 内容：胃癌の手術を中心、その手術から術前・術後管理、カンファレンス、症例検討会に参加 「この貴重な経験を今後の診療に役立てたい」
北川 博之 助教	平成 19年 12月 3日～12月 4日 順天堂大学 順天堂医院、食道・胃外科 内容：胸部食道癌手術及び呼吸器がん（肺癌）手術の見学、術前カンファレンス、術後管理「食道癌治療の質、技術の高さに関心」

11月30日 HP内に医局員の他施設での研修状況を掲載

外科専門医取得に関する当教室の指導方針

高知大学外科学講座 外科1 教授 花崎和弘
同外科レジデント 吉岡龍二

はじめに

下記の3項目が日本外科学会外科専門医制度による外科専門医資格取得のための必須条件である。

- 1) 日本外科学会に入会し、修練開始登録を行う
- 2) 修練開始登録後4年以上経た段階で予備試験(筆記試験)受験
- 3) 予備試験に合格後、修練開始後5年以上経て規定の修練をすべて経験した段階で認定試験(面接試験)を受け、合格すれば資格取得となる

1)については教室で手配し、2)についても教室で傾向と対策を行う。3)の規定の修練内容は、修練実績(後述する必須とされる最低手術経験数を参照) + 業績(筆頭者として研究発表または論文発表された合計20単位必要で、単位の詳細については最終ページに記載)の2点である。

以下に外科専門医取得に関する当教室の指導方針を示す。

12月7日 「外科学会専門医資格と教室の方針」を作成



12月15日 楷風会 特別講演 講師:園尾博司 教授



平成19年度 楷風会特別講演・忘年会 平成19年12月15日 於 ホテル日航高知旭ロイヤル

12月15日 楷風会 忘年会

教室構成員

(平成 19 年 12 月末現在)

教授	花 崎 和 弘
がん治療センター部長 (医療学講座医療管理学分野教授)	小 林 道 也
病院教授・准教授(医局長)	杉 本 健 樹
病院准教授・講師(外来医長)	並 川 努
講師	岡 林 雄 大
学内講師(病棟医長)・大学院生	秋 森 豊 一
学内講師	岡 本 健
助教	駄場中 研
助教	緒 方 宏 美
助教・大学院生	北 川 博 之
助教・大学院生	前 田 広 道
大学院生	甫喜本 憲 弘
大学院生	藤 原 千 子
大学院生	島 津 佐吉子
大学院生	市 川 賢 吾
研究生	濱 里 真 二
技術専門職員	山 崎 裕 一
事務補佐員	池 田 啓 子
事務補佐員	山 口 理恵子
技術補佐員	宮 地 恵 子
技術補佐員	竹 崎 由 佳

教室の診療研究活動

乳腺・内分泌

杉本 健樹

乳腺・内分泌外科では、現在、小児外科の緒方宏美先生の協力を得て診療を行っていますが、平成 20 年春から甫喜本憲弘先生と船越拓先生が専任として加わってくれる予定で心から活躍を期待しています。

今年度、最大のニュースは平成 19 年 4 月に厚生労働省の「マンモグラフィ遠隔診断支援モデル事業」で 95,550,000 円の予算を獲得したことです。平成 17 年 6 月から高知検診クリニックと行っている CR マンモグラフィのソフトコピーを用いた遠隔診断の読影件数が 10,000 件を突破し従来の検診と同等以上の結果を得られたことが評価されたものと考えています。「モデル事業」による通信機器の設置が 12 月に着工し、検診クリニックに加え幡多けんみん病院、仁淀病院、厚生年金高知リハビリテーション病院、函南病院の計 5 施設がネットワーク接続される予定です。本事業の成果を継続的に発表し続けると同時に、マンモグラフィ診断の支援を行う東洋人向け CAD (Computer aided detection) システムの開発を行う予定になっています。また、本事業の運営とマンモグラフィ検診の精度管理を担う NPO 法人の立ち上げ、ここ数年行ってきた読影医と放射線技師の育成のためのマンモグラフィ講習会の主催やピンクリボン運動などの啓蒙活動の実施母体としても活用していきたいと考えています。

平成 15 年から行ってきた色素法によるセンチネルリンパ節生検に加え、4 月に四国では初のラジオアイソトープ法を導入し、色素法単独で 94.8%であった同定率が併用後は 100%をキープしています。さらに、生理学の佐藤隆幸教授と共同研究を行っている蛍光法の新カメラシステムも開発が進み、フルカラーと蛍光を同時に表示できるようになり、実際の手術支援に有用なレベルに到達しました。現在、共同開発に乗り出してくれるグローバル企業との契約待ちの状況にきています。また、病理学の降幡睦夫先生と共同研究で駄場中研先生が行っている新しい前立腺関連抗原の乳癌での発現と予後の関連の研究も順調に進んでいます。

年末には楷風会特別講演会で日本乳癌学会理事長の園尾博司先生にご講演いただきました。消化器外科医の多い同門の先生方にも乳癌診療の現状をご理解いただけたことと思います。今後もこのような企画を続けていきたいと考えています。また、乳腺外科の症例数は引き続き増加して、平成 19 年の原発乳癌の手術件数は 63 に達しましたが、手術枠の問題で 1 ヶ月半待ちの状態が続いています。前述のように来年度はスタッフの増員もあり、手術件数のさらなる増加に対応できるものと思っています。

乳腺・内分泌 手術症例数	93
乳腺の手術	77
原発乳癌手術	63 (内センチネルリンパ節生検 33)
乳房温存術	35
乳房切除術	28
良性乳腺疾患	7
腋窩手術	2 (郭清 1 例、生検 1 例)
センチネルリンパ節生検	5 (術前化学療法症例)
甲状腺・副甲状腺の手術	16
甲状腺癌	7
良性	3
副甲状腺腺腫	6

食道

秋 森 豊 一

2007年当科において食道疾患で治療を行なった新規の患者は39名です。癌患者は36名で扁平上皮癌34名、腺癌1名、小細胞癌1名でした。癌患者で手術に施行したのは23名、非手術症例は13名(重複癌症例4例)でESD1例、化学療法単独4例、放射線単独1例、放射線・化学療法4例、術前待機2例でした。手術症例23例中、重複癌症例7例、根治切除率は22/23でした。手術は全ての症例で体腔鏡(胸腔鏡、腹腔鏡)の使用を行い手術侵襲の軽減を図っています。完全腹腔鏡下手術(TLGM)+胸筋温存小開胸手術14例、VATS+HALS2例、HALS+胸筋温存小開胸手術3例、開腹+胸筋温存小開胸手術1例、食道抜去2例(縦郭鏡使用)、開腹・経横隔膜切除1例でした。手術に際しては合併症対策として、入院前より耳鼻咽喉科のスクリーニング、心機能の評価、呼吸リハビリ(患者への啓蒙)、口腔内ケアを行ない、手術に備えるようにしています。入院後もまた、リハビリのチェック、術後早期からのリハビリの開始(1病日ICUから)早期経腸栄養の導入(術後24時間以内)を行うことで周術期合併症の減少、また出現しても重症化せずにすんでいます。早期離床の実現が可能となり、術後2~3日で歩行が可能となり、呼吸器合併症の軽減に役立っています。また、治療をチーム(病棟、ICUの看護師、リハビリのスタッフ)で行い、それぞれの不足部分をカバーできるように勉強会も行っています。診断では全症例でPET-CTを施行しており、これで3例に重複癌が見つかり術前診断をより正確に行なうことができるようになっていきます。

食道癌症例数	39
良性疾患	3(良性食道狭窄、アカラシア、逆流性食道炎)
悪性疾患	36(扁平上皮癌、腺癌、小細胞癌)
手術	23
非手術	13(ESD、放射線化学療法)

胃

並 川 努

胃癌に対する治療は内視鏡的切除、定型的手術、化学療法を適応に応じて使い分ける必要がありますが、私たち外科に紹介されてくる患者さんに関しても、自科内、内科との合同カンファレンスを通じて検討を行っており、内視鏡的切除も積極的に行っています。手術に関して常に、根治性と臓器機能温存のバランスを考えて治療方針を検討しており、腹腔鏡補助下手術、神経温存手術、空腸嚢を用いた再建等により、低侵襲で、機能温存・再建手術により、よりよいQOLを目指した手術方法を絶えず工夫して行っています。特に腹腔鏡補助下手術に関しては幽門側胃切除に限らず、胃全摘術にも取り組んでおり、さらに空腸嚢再建を組み合わせて行っています。これら手術の妥当性の検証も行うためGSRs、EORTC QLQ C-30、STO-22を用いてQOL評価を行っていますが、今後新たな評価方法について取り組むため、胃癌術後評価のワーキンググループにも参加しています。

S-1をはじめとして新規抗癌剤の登場により、胃癌における化学療法の位置づけはさらに重要なものとなってきており、生存率の向上は明らかなものがあります。こうした胃癌に対する化学療法に関して、ACTS-GC、JCOG9912、SPIRITSと本年は続けて新しいevidenceが確立された年でしたが、他にも様々な大規模多施設共同臨床研究が進行中です。私たちも手術不能進行・再発胃癌に対してのTASC、術後補助化学療法についてのSAMIT、術前化学療法のTC-NAC、2nd line化学療法のTRICS等に参加し、症例を蓄積しており、新たなevidenceの確立を目指しています。さらに今後中国四国発の臨床試験にも参加予定しています。

また高齢化社会の到来に対し、高齢者胃癌に対する胃切除後の新しい真菌症対策を目指した臨

床研究も現在進行中です。

胃手術症例数	65
胃全摘術	23
開腹幽門側胃切除術	22
腹腔鏡補助下幽門側胃切除術	11
噴門側胃切除術	1
胃部分切除術	4
その他	4

大腸

岡 本 健

大腸グループは昨年同様、小林道也（医療管理学教授）をスーパーバイザーとし岡本以下3人で病棟管理を行っています。2007年1～3月は駄場中・吉岡、4月からは駄場中・緒方で診療を行い、適宜ローテート中の研修医が仲間に入ってもらいました。昨年もそうでしたが、大腸疾患を中心に鼠径ヘルニアなどの一般外科領域やラパコレも担当しているため年間手術例は約460症例中、145例と1番多く手術を行っています。大腸がんに対しては腹腔鏡下手術を積極的に取り入れており、小林のもとで内視鏡外科学会の技術認定習得を一つの目標として岡本・駄場中が鋭意修練中です。研究のほうでは、多施設共同研究や当科単独での臨床試験が終了したものや新たに始まったものがあります。以下の研究が on going です。

- ・術後補助化学療法におけるフッ化ピリミジン系薬剤の有用性に関する比較臨床試験（治癒切除直腸癌に対するUFT療法とTS-1療法との比較検討）
- ・Stage 大腸癌に対する術後補助化学療法に関する研究
- ・大腸（Stage a・b）免疫パラメーターの解析
- ・進行・再発大腸癌に対する5-DFUR/CPT-11併用化学療法の検討
- ・進行・再発大腸癌に対するTS-1の有用性の検討

このように診療・臨床研究を行いながら、さらに来年は岡本・駄場中は博士号取得にも今年以上に努力していく意気込みです。（敬称略）

大腸手術症例数	74
良性疾患	10
内痔核	1
虫垂炎	6
直腸LST（腺腫）	3
悪性疾患	64
結腸癌	41（盲腸5、上行13、横行4、下行2、S状17）
結腸癌局所再発	1
盲腸悪性リンパ腫	1
直腸癌	18（Rs9、Ra3、Rb5、PRb1）
直腸カルチノイド	3
腹腔鏡手術（悪性疾患）	37
結腸	22
直腸	15（開腹移行4）

肝胆膵

岡 林 雄 大

2007年は花崎教授が高知に来られて2年目の年となり、診療および研究面においても飛躍の年となったと考えます。臨床では肝胆膵外科グループは94例の手術（肝切除71症例、膵切除23例）をこなして参りました。肝胆膵外科分野においては全国でも有数の手術症例数であり、教授以下、岡林、前田先生の3人のスタッフでこの症例を経験できたことを誇りに思っております。将来的には現在土佐市民病院で研修中の吉岡先生をはじめ、肝胆膵外科を志す同僚が増えていきそうですので、高知県の肝胆膵外科治療の向上も期待しております。また研究面におきましては学会活動・執筆活動においても充実した一年となりました。肝臓切除術周術期におけるアミノ酸製剤の有用性や、肝胆膵外科領域を中心とした人工膵臓による術中術後の血糖管理の重要性を主題発表および英文論文によって全国に伝えられたように思います。今後この分野におきましても発展させて行きたいと考えております。現在肝臓切除および膵臓切除につきましては前向きな臨床試験も行っております。どうしても切除症例となりますと、大学病院での集積だけでは困難な面もありますので、切除可能な肝胆膵外科症例におきましては大学病院に紹介して頂けましたら幸いです。現状に甘んじることなくますます精進していく所存で御座いますので、関連病院の先生方におかれましてもご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

肝胆膵手術症例数	94
肝切除症例	71
膵頭十二指腸切除症例	12
膵体尾部切除症例	6
膵全摘出症例	2
分節切除他	3

小児外科

緒 方 宏 美

小児外科領域は初代松浦喜美夫先生、その後松岡尚則先生により引き継がれていましてがお二人の先生が医局を離れられているため、H19年4月より就任させて頂きました。就任直前には小児外科不在の時期もあったため就任以降同年12月末現在までの全麻下手術は虫垂炎関連4件、鼠径ヘルニア3件、腸重積症1件、新生児小腸閉鎖症1件そして小児科より依頼のあった生検や処置数件と手術件数はまだ非常に少ない状態です。その他には障害児のGERD精査、腸重積整復、便秘の精査・フォロー、臍疾患関連、外陰部異常をはじめ小児科からのコンサルトなど徐々にではありますが外来、小児科・PICU病棟で診察をさせて頂いています。倉本病院長からも腹腔鏡による鼠径ヘルニア根治術など大学の特性を活かした診療が出来るよう他施設の先生方との交流を図れるようなシステムをご提案頂くなど、今後、小児外科を志望する先生方がしっかり研修できるように準備中の段階です。また、教育面においてもベッドサイド実習の学生を中心に写真のスライドを使った目に訴える講義を行い、若い先生方にも興味を持って頂けるよう努力しております。

小児外科手術症例数	10
虫垂炎	4
鼠径ヘルニア	3
臍ヘルニア	1
腸重積	1
腋窩リンパ節生検	
小腸閉鎖	1（新生児症例）

楷風会賞

第2回 楷風会賞を受賞して

杉本 健樹

平成19年度の私の活動を評価していただき、楷風会賞を受賞することができました。大変名誉なことと感激しています。また、選んでいただいた花崎教授と同門の先生方に心より感謝いたします。

私は、平成19年3月に助教授に昇進し、制度改変で4月に准教授となりました。8月には学内規定で新たにできた病院教授となり、乳腺内分泌外科と小児外科の部門長を併任することとなりました。また、医局長になり人事や当直割などを担当するようになりました。忙しい業務の中で院内外の当直にも追われながら収入が十分とはいえない医局員の現状を改善するため、医局長として関連病院の先生方に待遇面の改善をお願いしました。皆様にご快諾いただけただお蔭で、医局員の多くが日常業務に極端に疲弊することなく臨床とともに学術活動にも生き生きと取り組めるようになりました。この医局員の活躍が学生や研修医の目に活気ある医局の姿として写り、外科医を目指す医師の増加に繋がっていると確信しています。

また、「チーム医療」の実践を目標に附属病院ではクリニカルパス委員会委員長とNSTのディレクターをしています。2月にはカルポートでクリニカルパスフォーラムを開催しましたし、日本静脈経腸栄養学会のTNTプロジェクトの四国地区コアスタッフの一員として医師の栄養教育に参加しています。乳腺関連では、日本乳癌学会・乳癌検診学会の評議員に加え乳癌学会中国四国支部の理事となり、平成22年に中国四国地方会を高知で開催することとなりました。四国マンモグラフィ講習会を県内で3回開催し、検診マンモグラフィの読影医と診療放射線技師の育成に務めています。県内の活動では乳腺外科医の唯一の集まりである高知県乳腺疾患研究会の当番幹事として2回の定例会を開催し、平成20年度から同会を発展的に解散し、他職種を含む新たな研究会を会長として立ち上げることが決定しました。甲状腺関連では中国四国甲状腺外科研究会と高知県内分泌代謝研究会で世話人として活動しています。

臨床・学術面での活動は乳腺内分泌外科の紹介でも詳しく書きましたが、デジタルマンモグラフィの遠隔診断の実績が認められ、厚生労働省のモデル事業で約1億円の予算を獲得したことが昨年度最大の出来事です。現在、形成しつつある県内を網羅する診断ネットワークが有効に活用されるよう、乳がん部会の委員としてマンモグラフィ検診のデジタル化推進と市町村検診への施設検診に導入を県に働きかけていきます。

今後は大学の乳腺内分泌外科の足元を固め、院内でチーム医療が実践できる環境を作り、県内を中心に乳癌診療に関わる医師・医療関係者の育成や乳癌患者の啓蒙や患者会活動の支援に力を入れていきます。また、昨年度は国内外の複数の学会で主題発表を行うことができたが、この学会活動を励行すると同時に、今までの活動をまとめて英語論文として発信する努力をしています。

第2回 楷風会賞受賞者選考に当たって

花崎 和弘

該当年度に一番activityの高い学術的活動を行った楷風会員に贈られる楷風会賞の2回目の受賞者に杉本健樹先生を選考させていただきました。

選考の理由について述べさせていただきます。杉本先生は対象となる2007年1月より12月までの1年間に全国学会で数多くの主題発表を行いました。その中でも日本臨床外科学会では特別企画に採択されました。また香港で開催された国際学会でシンポジストに選出され、注目されま

した。特筆すべきは乳癌検診のグラントにおいて総額で一億円近い研究資金を高知大学およびその関連施設のために獲得したことです。

本年は杉本先生にとって講師から准教授への昇進や病院教授への昇進人事も重なり、大変充実した有意義な一年間であったかと思われます。

私からの要望ですが、この栄えある受賞を励みにしてこれからは多数の英語論文を発信してください。今後とも楷風会賞受賞者の名に恥じぬご活躍をしてくれるものと大いに期待しております。

第 2 回 Impact Factor 賞

第 2 回 Impact Factor 賞を受賞して

前 田 広 道

この度、第 2 回の Impact Factor 賞を頂きまして誠にありがとうございます。Journal of the American College of Surgeons と呼ばれる雑誌に噴門部癌の臨床病理学的検討を行なった論文が accept されました。1982 年以來、1 外科で行なった胃癌の手術症例がすべて data base になっており、必要な情報を過去の診療録から追加して使用させていただきました。そういった意味でも、これまでの 1 外科の臨床的成果が認められた結果であると思ひますし、多くの先輩先生方に感謝すべきだと感じております。また、論文作成にあたっては多くの点で加筆、修正を指導していただいた岡林先生、花崎教授にお礼を申し上げます。ありがとうございました。忙しい日が大半ですが、臨床、研究、教育のスタンスを忘れることなく継続をテーマに精進したいと思ひます。

第 2 回 Impact Factor 賞受賞者選考に当たって

花 崎 和 弘

該当年度に一番 Impact Factor の高い雑誌に論文掲載が認められた楷風会員に贈られる Impact Factor 賞の 2 回目の受賞者に前田広道先生を選考させていただきました。

選考の理由ですが、選考対象となる 2007 年 1 月より 12 月までに掲載または受理された論文の中から、前田先生の論文(Journal of American College of Surgeons)が 2006 年 journal citation report より一番高い impact factor を有していたためです。

岡林講師の優れた指導もあって、前田先生はこの論文の他に大学院 1 年目で学位論文も仕上げました。後期研修医 2 年目で数十例の肝切除を含めた数多くの手術を執刀しているだけでなく、既に 10 編近い英語論文も書き上げ、グラントも 2 つ代表で獲得しました。それらの功績により 10 月 1 日より助教に昇進しました。私のモットーである「speed and activity」を実践しているその努力と才能に更に磨きをかけていってください。

この受賞を機に驕ることなく、これからも謙虚で前向きな姿勢で臨床と研究の両立を目指して日々努力してくれることを願っています。

関連病院の手術件数

申し訳ありません。次のページへお進み下さい。

学会専門医

平成 19 年 12 月末現在

日本外科学会

荒木京二郎	安藤 徹	井関 恒	氏原孝司	臼井 隆
尾形雅彦	尾崎信三	上岡教人	上地一平	河合秀二
川崎博之	川村明廣	川村達夫	北川尚史	北村龍彦
北村宗生	計田一法	小高雅人	小林昭広	小林道也
杉本健樹	杉藤正典	竹下篤範	竹増公明	田中 誠
駄場中研	田村精平	都築英雄	遠近直成	直木一朗
長田裕典	中野琢巳	並川 努	花崎和弘	藤原千子
古屋泰雄	別府 敬	甫喜本憲弘	松浦喜美夫	松岡尚則
松森保道	溝渕敏水	森田雅夫	村山正毅	森 一水
安原清司	山崎 奨	山本真也	山本 拓	

(専門医指定施設：名簿記載順)

高知大学医学部附属病院	国立病院機構高知病院	近森病院
幡多けんみん病院	がんセンター東病院	

(専門医関連施設：名簿記載順)

竹下病院	高知リハビリテーション病院	細木病院	いずみの病院
野市中央病院	田野病院	くろしお病院	くぼかわ病院
島津病院			仁淀病院

日本消化器外科学会

岡林雄大	岡本 健	上地一平	北川尚史	公文正光
小林道也	遠近直成	長田裕典	並川 努	花崎和弘

(専門医認定施設：名簿記載順)

高知大学医学部附属病院	国立病院機構高知病院	近森病院
がんセンター東病院		

(専門医関連施設：名簿記載順)

藤原病院	くろしお病院	いずみの病院	竹下病院	くぼかわ病院
がんセンター東病院		細木病院	安芸病院	仁淀病院
野市中央病院	近森病院	岩国みなみ病院	田野病院	
高知リハビリテーション病院		幡多けんみん病院	大西病院	

日本消化器病学会

荒木京二郎	安藤 徹	臼井 隆	尾形雅彦	岡林雄大
岡林敏彦	岡本 健	上地一平	川崎博之	川村明廣
北村嘉男	久禮三子雄	小林道也	島村善行	島本政明

清藤 敬
堀見忠司

遠近直成

並川 努

花崎和弘

古屋泰雄

(認定施設：名簿記載順)

国立病院機構高知病院
がんセンター東病院

高知大学医学部附属病院

幡多けんみん病院

(関連施設：名簿記載順)

細木病院
安芸病院

近森病院
くぼかわ病院

土佐市民病院

野市中央病院

田野病院

日本乳癌学会 (乳腺専門医)

北村宗生

杉本健樹

(認定・関連施設)

高知大学医学部附属病院

日本小児外科学会

北村龍彦

日本内視鏡外科学会

小林道也 (技術認定：消化器・一般外科)

日本消化器内視鏡学会

尾形雅彦
近森正幸
堀見忠司

金子 昭
寺田紘一

河合秀二
遠近直成

小林道也
並川 努

島本政明
古屋泰雄

医局スタッフより

開講 30 周年によせて

技術専門職員 山崎裕一

1980年4月1日から高知医科大学第1外科学教室に技官(実験助手) 現在は技術専門職員として働いています。ちょうど私が勤務したころが、教室が本格的に機能し始めた時期になりますので、その当時のことを、研究室を中心に振り返ってみますが、記憶だよりなので、間違いはお許し下さい。

緒方教授(当時)の電子顕微鏡を使った研究の補助がメインでした。当時、電顕による研究はその技術が確立し始めたころで、そのため1外科に採用される前の1年間、緒方先生が岡山時代より懇意にしていた、電顕の専門家である、倉敷にあるクラレ中央研究所、第4研究室の窪津彰研究員のもとで、電顕に関する技術を修得しました。身分としては正式な大学職員でなく、クラレの職員でもない、中途半端なものでした。

勤務し始めた高知医大には、講義棟、実習棟、体育館のほか、出来て間もない基礎臨床研究棟や管理棟がありました。今では研究棟は病棟や看護学科棟に比べ、ずいぶん薄汚れていますが、きれいなときもありました。図書館が建設中、附属病院施設はその年の秋に着工という状況でしたから、しばらく工事車両の出入りが途切れることはありませんでした。

一方、研究室は岡山からの引越しが一段落したところで、荷物運びや整理、機器の設置などの私の苦役は間逃れることが出来ました。秘書は坂本芳子さん(山本恒義先生の奥様) 技術補佐員には矢野景子、高橋和代さんがいました(私と入れ違いで、彼女たちに特殊な技術を要する超薄切片作成の伝授のため、岡山から今枝さん、尾崎さんが短期間いたようです)。秘書は坂本さんから黒岩さん、武政志津さん、阿部京子さんから現在の池田啓子さんへとバトンタッチされていき、他に事務補佐員として嶋沢知津さん、須藤洋未さんがいました。超薄切片技術は、それを主に担当していた矢野さん、柏井千絵子さん、六久保直美さん、岡崎妃早子さん、宮田素子さんに、その技術は順に受け継がれていきました。しかし私にはこの技術は忍耐強さや繊細さ、慎重さが要求されるため、女性たちには太刀打ちできませんでした。その他の技術補佐員としては、在職順に松本美保さん、山本晶さん、井上真由美さん、福井真生さん、前田真紀さん、水口知子さんたちが、パラフィン切片、写真、実験動物の世話、カルテ探しなど事務的なこと以外で、教室に関わる全てのことを、超薄切片担当者とともに、仕事を上手く分担して、忙しく働いておられました。

さて研究室ですが、病院開院前まではのんびりしていて、昼は外へ、夜は居酒屋、カラオケなどへ幾度となく連れて行ってもらいました。研究活動が本格的に始まって、それまで実際に犬やラットなど動物を使用したことがなかったため、最初は面食らいましたが、慣れとは恐ろしいものです。動物実験での前立ちや状況によっては術者を頼まれたこともあり、そうして得られた検体を用いて電子顕微鏡や光学顕微鏡を活用して多くの先生たちが学位を取得されましたが、中には教えられたとおりの処置で、予想外の結果になったのが、さも処置が悪かったと言わんばかりの方には憤ったものです。ある研究では処置2-3日後に縫合不全で死亡したと思われる動物を、兼業先の大学から離れた病院で勤務していたため、剖検をやらされる羽目になったときには閉口したのですが、法医学教室の職員の大変さも少し分かりました。

よく人にあなたのお仕事とは聞かれ、説明するのに苦労しましたが、シャンプーのCMで髪の毛の写真が出てくるけどあんな写真を撮っていますと言うとなんとなく分かってもらえます。メインの仕事である緒方先生の研究のサポートですが、まず緒方先生の研究に対する意欲、熱心さには驚かされました。本当に臨床の先生?とよく思いました。その緒方先生が1992年に日本電子顕微鏡学会(現電子顕微鏡学会)より「瀬藤賞」を、また1995年に日本臨床電子顕微鏡学会(現日本臨床分子形態学会)より「安澄記念賞」を受賞され、さらに昨年(2019年)の年報にも記載しましたが、Bloom & Fawcettの“A Textbook of Histology”に関連論文が引用されたのも当然のことだと思われれます。これらの素晴らしい業績の一部でもお手伝いできた幸運に感謝いたします。

形態学の分野は、今の日本の現状と同じく、前述の学会名の変更を余儀なくされるほど、変化を求められています。現教授の花崎先生は形態学とは無縁の先生ですから、その研究手段も違い、

私の変化は当然ですが、高知大学の外科 1 を日本の中でも光り輝く教室に変革させようと、次々アイデアを出してこられ、この熱意はある意味、緒方先生と似通ったものがあるように感じます。「教室ホームページ」や「求められた意見」を通じて、輝く教室作りの一助になっていこうと思っています。

医局秘書 池田啓子

開講 30 周年おめでとうございます！！

そして、昭和 58 年からの 25 年もの長い間、この外科学教室で御世話になり本当にありがとうございます。

この外科学教室は、初代教授の緒方卓郎先生がゼロから基礎を作られ、外科診療の他に、長年電子顕微鏡を使った研究をされてきました。緒方先生は現在も実験や指導で大学に出てこられ、時々医局に顔を出して頂いていますが、現役の時からとにかく研究熱心で、いつも切れ目なく論文を発表されていました。現在、大体の論文は電子ジャーナルによって瞬時に手元で見ることができますが、当時は旧ソビエト連邦、チェコスロバキア、東ドイツ、西ドイツ、エジプト、タンザニア、イスラエルなど、世界各国から別刷論文請求の葉書がたくさん届き、その張られた切手を眺めながら、見知らぬ遠い異国に思いを馳せたものです。

平成 8 年には、2 代目教授の荒木京二郎先生に引き継がれました。先生は温厚な人柄でいつも患者さんに優しく、手術が大変上手だと評判が高くいらっしゃいました。先生の在任中には、平成 17 年に高知大学との統合、独立行政法人化という大きな動きがあり、委員として膨大な資料作りと、とにかく会議の連続で大変苦勞をされていたことが思い出されます。

そして、平成 18 年の満開の桜の中、花崎和弘先生が 3 代目の教授として信州から赴任され、この外科学講座外科 1 の教室に新風を吹き込まれました。

花崎先生は、いつも私達に「ありがとう！」と気さくに声を掛けてくださり、優しさと厳しさをもって教室を引っ張り、朝早くから夜遅くまで診療・手術・研究・外科医の育成と、超多忙な毎日を送っておられています。

また、昨今の外科医不足問題に対し、「学生がどうしたら大学に残ってくれるのか」と熱い気持ちで色々なアイデアを出されて「帰学率向上のための WG」の座長として尽力されています。

四国で初めて実施された中学・高校生を対象にした「外科手術体験セミナー」は好評で反響も大きく、今年も実施されますし、全国の医学部 5 年生の学生に少しでも高知大学の外科 1 に興味をもってもらおうと企画した「見学ツアーセミナー」は現在応募者を募集しているところです。

先日、通っているプールで第一外科の第 1 号の手術患者さんと出会いました。70 歳過ぎのそのご婦人はとてもお元気に泳いでおられ、緒方先生や外科の先生方にとっても感謝されていました。

またボランティアで参加している高知がん患者の会で、患者さん達から外科 1 の先生方の評判を聞く度に、この外科 1 で働いていることを誇りに思います。

タイプライターからパソコンへと時代は変り、また、独立行政法人化と統合によって事務の仕事はシステム化しましたが、逆に教室に課せられる部分が大変多く煩雑になってきています。

花崎先生がモットーとしている「speed and activity」を合い言葉に、医局スタッフ一同、これからも一生懸命頑張っていきたいと思います。

医局秘書 山口理恵子

30 周年おめでとうございます。

去年の年報創刊に続き、今回の第 2 号が 30 周年記念誌となり、現在の外科 1 の勢いがそのままに現れているように思います。先生方の日々の頑張りの積み重ねが 30 年という歴史を創り上げてきたのだと思います。この先、益々外科 1 がいろんな形で発展されますようお祈り申し上げます。

さて、医局秘書の仕事、と言っても実に多様で、最初の頃は本当に肉体労働の方が多かったように思います。先生方の研究のために、大量のカルテやマスター袋を医局に借りてくる仕事はなかなか腕力のつく力仕事でした。現在はカルテやフィルムの電子化が進み、その労力も随分軽減されてきました。また、事務員の部屋が模様替えされ、池田さんを筆頭により強力な事務体制へと現在移行中です。こちらはなかなか思うような結果が出ておりませんが、事務員同士試行錯誤しながらスピーディで正確な事務を目指して奮闘中です。またお気づきの点がありましたらどんどん声をかけてください。

まだ 8 年という教室の歴史からみれば短い関わりではありますが（歴代秘書から言うと結構長くなりましたが）、少しでも教室の発展にお手伝いできるよう頑張りたいと思います。

医局秘書 宮地恵子

開講 30 周年おめでとうございます。

昭和 53 年に高知医科大学が開学し、教室が開講した年に私もここ南国市で生まれました。外科 1 でお世話になり始めて、今年の春で 8 年半になります。昨年からは文献複写や会計事務などの仕事に加えて、出張関係の事務も池田さんと一緒に担当させていただいています。

私自身の知識不足と 1 年目ということもあり、先生方にはご迷惑をかけることも多々ありましたが、今年からは、先生方がより良い発表をできるよう快適な出張をしていただけるようにしたいと思います。

教室と同じ年の 30 歳。教室は人事や国際学会の発表や全国学会の主題発表の増加、科研費や裁量経費・助成金の採択など明るいニュースの多い一年でした。特に、研究費の獲得では会計事務という立場上、管理は大変ですが、採択される数の多さに教室の勢いを感じています。どんどん発展する教室に負けないう今年も一生懸命頑張ります。どうぞよろしくお願いします。

実験補助 竹崎由佳

教室開講 30 周年、おめでとうございます。

大変記念ある誌面に文章を添える事ができ大変嬉しく思っております。私は外科学講座外科 1 教室に勤務して 4 年半となりました。この間に荒木京二郎名誉教授にお世話になり現在は花崎和弘教授に温かくご指導頂いております。

私は実験補助という立場ではありますが手術の際、参加させて頂いて「命の重さ」や「外科は最後の砦」という事を先生方の姿を見て強く体感し又研究の重要性を感じ日常のモチベーションに繋げる事ができ大変勉強になっております。研究した事を臨床で活かすという事を念頭に置きこれからも頑張りたいと思っております。今後共、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

楷風会名簿

申し訳ありません。次のページへお進み下さい。

編集後記

はじめに、年報作成に関して多大なる貢献をしていただいた医局秘書の池田さんをはじめとする外科1教室スタッフの皆様には厚く御礼申し上げます。特に長年にわたる多数の業績の掘り起こしおよび古き善き時代の写真の収集や整理などを含めた膨大な仕事をこなしてくれた山崎さんの功績は特筆すべきものでした。

30周年記念誌を兼ねた年報の特別号(第2号)はいかがだったでしょうか。お蔭様で高知大学外科1教室も30年の間に徐々に力を蓄え、こうした記念誌が無事発行できるまでに成長しました。

今回は30年分の歴史を一気に凝縮して作成したためになかなか無理があったのは事実です。どうしてもオムニバス形式にならざるを得ず、見落とししてしまった大切な部分もあったかもしれません。また古い業績の中に出典が明らかでないために割愛せざるを得なかったものが少なからずあったことはとても残念です。

教室の歩みや業績を正確な記録として保存する意義も兼ねた記念誌や年報の発行に反対な方はいないと思います。しかし“自分だったらこんな記念誌にしたかったのに”とか“自分はこんな記念誌を期待していたのに”などの感想をお持ちの方はきっとおられることでしょう。今後改善に努めて参りますので、どうか忌憚の無いご意見を教室までお寄せください。

今後の記念誌発行の時期ですが、皆様のご賛同が得られれば、より正確な記録を残すためにもあまり間隔を空けずに教室にとって節目に当たる年には記念誌(しばらくは年報と兼ねさせていただきます)を随時発行していこうかとも考えています。記念誌は温故知新・温故創新という意味で大切です、年報は現在の活動状況を客観的に評価し、反省すべき点はきちんと反省する、いわゆる自浄作用を促進させるという面で重要です。

昨年度も触れましたが、年報の編集は第5号までは私が直接関与し、“編集長”を務める予定です。そして第6号以後はどうか教室員の方々で育てていってください。次回の年報にはもっとたくさんのハッピーニュースと輝かしい業績が届けられることを期待しています。

末筆になりましたが、皆様方の益々のご健勝およびご多幸を心からお祈り申し上げます。

平成20年1月
花崎和弘

楷風

高知大学医学部外科学講座外科1
開講30周年記念誌
年報 第2報 2007年(平成19年)

発行者 高知大学医学部外科学講座外科1
花崎和弘
〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮
TEL: 088-880-2370 FAX: 088-880-2371

発行 2008年(平成20年)2月

印刷 (株)伸光堂

外科学講座外科 1 連絡先一覧

住所	〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮
----	--------------------------

e-mail	im31 kochi-u.ac.jp (を変更)
--------	---------------------------

電話(秘書室)	088-880-2370
---------	--------------

FAX	088-880-2371
-----	--------------

教室ホームページの URL	http://www.kochi-ms.ac.jp/~fm_srgr1/index.html
---------------	---

電話(教授室)	088-880-
---------	----------

電話(図書室)	088-880-2603
---------	--------------

電話(大学院棟)	088-880-2372
----------	--------------

電話(3階東病棟)	088-880-2495
-----------	--------------

電話(医学部代表)	088-866-5811
-----------	--------------
